

モラトリアム研究者の思い出 —日野舜也さん座談① 北海道時代—

鵜飼 正樹 *

日野舜也さん（大先輩だが、あえて「先生」ではなく「さん」としたい）は、2004年3月、京都文教大学を定年で退職された。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所をご退職後、京都文教大学人間学部文化人類学科には、1996年4月の設立時から教授として赴任され、新設大学の草創期にあって、その教育・研究の充実にご尽力いただいた。1998年4月から2年間は文化人類学科長、2000年4月から4年間は人間学研究所所長を歴任され、また、2000年4月からは、大学院文化人類学研究科もご担当された。

日野さんの、アフリカ都市研究のパイオニアとしてのご業績については、あらためていうまでもない。多数のご著書、ご論文が、それを雄弁に物語っている。同時に、日野さんは、「愉快に学問すること」をそのまま体現されたような研究者である。同じ研究者仲間として、わたしはそれがまぶしく、うらやましい。

夕暮れどきともなれば、文化人類学科の教員の研究室が並ぶ、普照館2階の廊下に、すきっ腹にしみこむおいしそうなかおりがただよってくる。そのかおりにひかれて廊下の奥へ足を運ぶと、ラウンジの丸テーブルの上に、お手製のカレーやシチューや鍋、それにエビスビールとグラスをならべ、日野さんが椅子に腰かけている。日野さんお一人のときもあれば、おおぜいの学生や教員に囲まれてにぎやかなときもある。そして、日野さんは、かならずこうおっしゃるのだ。

「よかったら、食べていきなよ」。

何度、学生が、教員が、そのお言葉にあまえたことであろうか。

ずっと研究所勤務だった日野さんは、ご自分のゼミをもち、学生を指導されるのは、京都文教大学に來られてはじめてのことだったそう。けれども、多くの学生たちが、日野さんの学問をしたい、人柄にひかれ、集まった。2002年と2003年には、フィールドワーク実習の授業で、ご自身のフィールドであるタンザニアのザンジバルまで、20名あまりの学生を引率された。学生の指導はなにかとたいへんだろうと思うのだが、日野さんはニコニコと、「出来の悪い学生ほど个性的だ」とおっしゃるのがつねだった。

人のいいのもほどほどにして、いいかげん怒ってください。はたから見えて、そういいたいくなることも、何度かあった。それでも日野さんは、怒られない。

わたしは、アフリカ研究者でも、文化人類学者でもない。日野さんのフィールドについては、土地勘もないし、今後も足を運ぶ可能性は少ない。それでも、日野さんがフィールドにいる姿だけは、なぜか目にうかぶ。精力的にインタビューして回るといふより、好奇心のおもむくままにうろつき、ゆったりとフィールドの時間に身をゆだねる。そして、夕暮れどきともなれば、ビールをかたむけ……。そうしているうちに、それまで見えなかったものが見えるようになってくる。

2004年2月から3月にかけて、退職前のお忙しい時間をぬって、日野さんの学問と人生を、ご自身の

* 京都文教大学 文化人類学科助教授

口から語っていただいた。ここに収録するのは、その第一幕、北海道に生まれ、北海道大学文学部で恩師にめぐりあい、研究者の道をあゆみ、アフリカに出発する、日野さん30歳すぎまでの話である。

インタビューは、聞き手であるわたしにとって、たいへんぜいたくで、幸せな時間であった。学問の青春時代と、ご自身の学問的形成期とがかさなった、日野舜也さんの研究者人生は、日本の文化人類学史の貴重な証言である。また、これから研究者をこころざす若い人にとっては、おおいに刺激になるだろう。そして、何よりも、「愉快に学問すること」を知っている日野さんの生き方は、わたしたち研究者仲間にも勇気をあたえてくれる。

京都文教大学大学院生（当時）の片岡千代子さんには、インタビューに同席し、テープを起こすという、煩雑な作業を買ってでていただいた。また、人間学研究所の立石尚史さんには、注の作成に協力していただいた。長時間のインタビューに応じていただいた日野さんともども、記して感謝します。

なお、本文についての責任は、すべて鶏飼にある。

江別というまち

わたしは、1933年4月30日、北海道札幌郡江別町（現・江別市）に生まれました。

江別というまちは、札幌から西に20キロくらいいったところなんですけれど、非常におもしろいまちで、わたしが育ったころは、第1次産業と第2次産業と第3次産業が33%ずつでした。これは、全国でも珍しいと思います。農村であって、かつ王子製紙とか北海道電力発電所とかがあって、第2次産業の人もいて、かつ札幌へ通勤や通学する人もいます。いまはもちろん、第3次産業が非常に多くなっていますけれども、そんなことで割合おもしろいまちなんです。

いまはもう、札幌市に近い部分が大団地になって、そこが中心になっていますが、わたしの育った家は、石狩川支流の江別川にちかい、古くからのまちの中心地にありました。いまでは完全に旧市街になっています。

江別はどういう形で発展したかという、石狩川の船の交通と、道央部の炭鉱地域、雑穀生産地域と小樽をむすぶ鉄道の、いわば交通の要衝だったので、まちの中心地には、雑穀商店や、馬具屋、蹄鉄屋、川の交通業者などが軒を並べていました。また、それらの顧客を相手に、履物屋、呉服屋、料理屋などがあり、近くには遊郭もあったようです。川辺には、大きな穀物倉がならび、いまもそのいくつかが残っています。わたしのうちのすぐ向かいも、ずうっと4、5軒雑穀屋さん。そして、すぐその後ろが川のふちという、そんなところでした。

7人きょうだいの5番目で長男

わたしは、7人きょうだいの5番目で長男です。上が姉4人、そしてわたしで、妹で弟。父親にしたら、待ち焦がれていた男の子だったんですね。だから、わたしが4月30日に生まれたら、もう5月1日にはうちの親父が鯉幟とポールを手配したとかいっていました。

舜也という名前は、わたしの祖父が漢学をやっていたので、中国の王様の名前からとったらしいんです。このじいさん、わたしはただのじいさんだと思っていたんですけど、あとから聞くと、けっこうすごいじいさんで……。明治10年くらいにケプロンっていうアメリカのおかええ外国人がやって来て、北海道の開拓を手伝ったんですが、その人が札幌から釧路まで馬でいったらしい。まだ鉄道なんかないそのときに、何週間もの旅をいっしょにしているんです。だから、たぶん、英語をしゃべったんじゃないかと思うんです。もちろん、わたしが子どものころは、英語をしゃべるじいさんだなんて全然思えなかったんですけど。

でも、すごいモダンなじいさんでね、いまでもおもしろいものが残っているんです。明治のころ、つまり19世紀に買った地球儀。まだね、アフリカは、タンガニイカ湖とビクトリア湖の区別がなく、あわせてウジジ湖なんです。スタンレー、リビングストンの探検時代の地図なわけです。そんなのとか、一見ステッキで、雨が降り出すと、スッと真中抜くとコウモリ傘になるのとか。そういうような、けったいなモノもけっこう持っていました。

た。やっぱりあのころから地球儀を持っているというのは、めずらしいと思います。

小学校まではガキ大将

わたしは、ものすごい腕白で、小学校にはいるまではガキ大将でした。そのへんの子どもを連れて、悪いことばかりしていました。たとえばどんなことやるかっていうと、汽車の鉄橋があるわけです。また仲間に1人すごいのがいて、そこを何時に汽車が通るか全部覚えている。そして、「いまから10分間大丈夫だ。みんなで渡ろう」というわけです。それで、トコトコ渡ったり。いま考えたら恐ろしいんですけども。消防ごっこなんていって、よそのごみ箱に火をつけたり。そして、みんなで消したりして、叱られたりね。

ともかく、そういう子だったらしいけれど、小学校にはいったらとたんに、わたしより強いのが一杯いるもんだから、いじめられっ子になるわけです。それこそ「今日何回泣いた？」とか親に聞かれていたようです。

小さいころは、何になりたいと聞かれたら、きまってチンドン屋さんになりたいといっていたらしいです。そして、じっさい、まちを練り歩いているチンドン屋さんのあとをずっとついていて、迷子になって、「あれっ、日野さんの坊ちゃんが迷子になっている」とだれかに連れ帰ってもらったこともあるらしい。

だけど、そのうち、その時代の教育よろしく、ある時期から「何になりたい」って聞かれたら「兵隊さんになりたい」っていいだしたらしいですけど。だからそのころ、わたしの家の一町四方で、わたしの登っていない屋根はないという。3階建ての家まで屋根よじ登って、一度も落ちたことはありません。

地図をみるのは子どものころから大好きでした。まだ、韓国や台湾が真っ赤で、世界中に英領のピンクや、仏領の緑がいっぱいの地図でした。わたしのそのころの特技は地図が得意なのと、お相撲さんの名前を序二段まで知っているというのと、そのくらいでしょうか。それから、天皇の名前を全部いえました。神武、綏靖、安寧、懿徳……。今上天皇（昭和天皇）まで、127代かな、全部そ

らでいえました。だけど、さかしい子だったと思います。大人のことに口出しして、甲高い声で。いまでもちょっと、そういう傾向はあるようですが……。

親父は医者

わたしの親父は、まだそのころは北海道大学の医学部がなかったものですから、仙台にあった東北大学の医専コースというんでしょうか、そこを出て医者になって、大正の中期からずっと、江別の、そのころのいちばんの中心街に面したところで、病院をやっていました¹⁾。

もともと、わたしの曾祖父は、日野祖博という名で、宮城県北部に岩出山というところがあるんですが、そこに伊達藩の支藩があって、その家臣でした。明治維新のときに賊軍になって、それで、殿様、伊達邦直以下、藩の大半が北海道に移住したわけです。そのときの家老が吾妻謙という傑物で、開拓の中心になりました。本庄陸男²⁾という小説家があります。すこし左翼的な小説家だったのですが、その人が『石狩川』という小説を書いています。これは、のちに東映で『大地の侍』という名で映画化されています。その舞台になっている。それで、わたしの祖父、祖母ともに、7歳だったそうですけれど、両方とも親について北海道に來たわけです。そして、紆余曲折いろいろあって、結局、石狩平野の当別というところに定着したわけです。まわりはほとんどがうっそうたる原始林で、ゴミ捨て場にはオオカミが餌あさりに来ていたと、祖母が昔語りをしていました。

それで、わたしの親父が生まれたのが明治27年、1894年。じいさんは侍から百姓になったんですけど、息子は百姓にしたいくないということで、長男だったわたしの父親を、医学の方に進ませたわけです。卒業後は、北海道に帰って、当別で開業すればよかったのかもしれないのですが、そこには老川さんという人望のあるお医者さんがいたものですから、そこから13キロほど離れた、江別で開業したわけです。大正の中ごろの話です。それから、ずっと、その江別の中心街で病院を開いていました。そのころは、ものすごくはやった医者だったらしいです。そこで、わたしが

生まれたのが、昭和8年、1933年ということになります。

そのころは、いまとちがって、いわゆる専門病院というのがありません。わたしも、親父が医者をやっているのをみたことがあります。風邪をひいた人から、皮膚病で来た人から、井戸掘りをしていて腕を潰されて切断をしなければならぬ人から、いろんな患者さんが来ました。それで、自分で手に負えない者は、そのころは救急車がありませんので、消防自動車に積み込んで、札幌へ送るという、そんなこともありました。冬の深夜に、往診を頼みに来た馬そりに、湯たんぽを用意して出かけ、早朝に帰ってくることもありました。近辺10キロには、ほかに一人も医者がいなかったようなことだったようです。ですから、当然わたしは医者になるべく、育てられたわけです。

小学校のおわりころは、昭和19年から20年にかけてですから、太平洋戦争（そのころは大東亜戦争といってましたが）末期で、江別では、王子製紙の工場が、木製飛行機の工場になっていました。北海道特産の牛乳から作ったカゼインが、木製飛行機の接着剤に最適だというようなことだったようです。そこで、その飛行機を飛ばせる飛行場が必要であるということで、小学校5年のころから、その飛行場建設の勤労奉仕にかり出されました。学校での授業はほとんどありませんでした。朝鮮で徴用された人たちがたくさん働いていました。われわれも、いちおうモッコなどを担いで、たいした力にはならなかったと思うのですが、怖い将校さんに怒鳴られながら働きました。ある時は、帰りの路上で空襲警報がかかり、道ばたの堀に隠れたわれわれの上空を、アメリカのコンソリデーデッド爆撃機が、通り過ぎていったのを見ました。防空壕のなかでしたが、空襲や機銃掃射も経験しました。わたしより10歳くらい年かさの人たちが、沖縄やどこかで戦死したというニュースはよく聞かされていました。それが当たり前だと思っていたのです。われわれも本土決戦とかいって、竹槍で戦うくらいの心がまえは教え込まれていました。教育って恐ろしいものです。

ただ、わたしの疲労ぶりを見たのでしょうか、5年生のおわりころ、家族が、わたし以下の妹弟

を、当別の祖父のところに疎開させてくれました。学校に行く必要もなく、ヒヨコと遊んだり、ウマに乗せてもらったりしていました。

終戦の時、つまり、1945年の8月15日には江別の自宅にいました。建物の強制疎開で母屋をぜんぶ壊された家でした。ラジオの雑音がひどくて、子どもの私にはよく聞き取れず、父親が涙したのを何となく眺めていました。朝からすごく天気の良い日でした。

夏休みが終わって、学校へ行くと、もう先生が、戦争が終わった虚脱状態にありました。国史の教科書に墨を塗ったり、民主主義なんて言い出したのは、もう少し後のことです。大人や先生はともかく、われわれはけっこうすぐに新しい体制に適應していったのじゃないかな。親父にくっついて、近所のキリスト教会に英語を習いに行ったのを覚えています。ものにはならなかったですね。

最後の旧制中学生

それで、小学校は江別ですけど、わたしたちが子どものころは、まだ旧制中学で、江別には中学校がなかったんです。小学校しかなくて、札幌に旧制中学、そのころは札幌第一中学、第二中学、それから札幌市立中学と三つの中学がありました。江別のまちからそこにはいる子は毎年2人か3人ぐらい。全滅って年もあったくらいだったんですが、ちょうどわたしたちが受けたのは旧制中学の最後で、戦後、1946年に入学試験を受けたときに、倍率はいつもと同じ5倍か6倍ぐらいだったんですけれども、なんとわたしの小学校から14人はいっちゃったんです。

そして、そのまんま、ずうっと汽車通学を続けて、中学3年、高校3年、大学が6年、それから大学院からオーバードクターまで含めて18年、汽車通学をしたことになります。片道45分、毎日往復で1時間半、18年間の全部を足せば、そのうち1年は、汽車のなかということになります。

同じ小学校から十何人も一緒にはいったもんですから、団体で汽車通学です。上級生も何人かいましたね。上級生には予科練帰りとか、海兵帰りとかそういう、荒っぽいのがいました。そのころ

はまだ、下駄履きで学生帽かぶって、中学の制服を着て。その上級生たちは、いわゆるダルママントを着て。

戦後のたいへんなときですから、汽車はいつも超満員で、デッキにぶら下がったり、窓から乗車したり、ときには、機関車の石炭車の上にも乗りました。

札幌駅からわたしのはいった札幌一中までは、約3キロあるんです。それを、ずうっと毎日歩いていきました。路面電車もあったんですけども、まだものすごい混んでいる時期で、とても乗り切れなかったの、毎日歩きました。

その、歩くところが、札幌駅の前から札幌の中心街、四丁目目というのが中心街なんですけれども、そこから札幌の第一の歓楽街、ススキノを通り抜けて、中島公園を抜けて、私の中学まで歩くんです。だから、毎日毎日行きと帰り、盛り場を、まあ、まっすぐ歩いたこともありますし、ぜんぜんまっすぐ歩かないこともありました。そのころはまだ汽車が少ないので、2時半くらいの汽車に乗り遅れますと4時半くらいまでない。2時間くらい汽車がないので、ほとんどわざと汽車に乗り遅れまして、2時間くらい遊んで帰るというようなことをやっていました。

戦後間もない札幌のまち

そのころの札幌にも闇市がありました。札幌は空襲にあわなかったから、新宿や池袋のような焼け跡とはちがいましたが、大通りや川べりなどの空き地には、いくつか闇市ができていました。東京や大阪のような大都市ではないし、北海道でしたから、餓死者が出るほど、物資の不足が切迫していたわけではないのですが、それでも、いろいろな食べ物とか、衣類とか、雑貨とかを売っている闇市ができていました。

それから、札幌の四丁目の真ん中には三越がありました。母屋はアメリカ軍に接収されて、PXになっていましたが、隣の空き地に仮設マーケットを建てて、まだ商品がたくさんないので、食料品を売るマーケットになっていました。闇屋ではないけれど、そこでかなりいろんなものを売っていました。そこなんか、わたしが毎日2回は通る

ところだから、学校がえりにはいつものぞいて買い食いなんかしてました。

ススキノなんかは、そのころからやっぱり飲み屋が多かったです。その中の1軒の食堂が、あまった豚汁にラーメンを入れてみたら美味しいっていうことになって、それが「三平」っていうラーメン屋の発祥です。札幌ラーメンっていうのはそのへんから始まったみたいです。そんなところの、発祥のあたりから知っています。

いずれにしても、中学・高校時代から、もう、まちの中を遊び歩くのが日課のようになっていました。毎日何人かで群れをなして歩いているわけですから、ちゃんといきつけの場所がいくつかできて、そこはわれわれ高校生っていうことを知っていながら、蕎麦屋さんだけでも、ビールを注文すると、ちゃんと売ってくれる。そこをよく根城にしましたね。それから、キャンプなんかいつでもいつもお酒を飲んでいました。修学旅行にもウイスキーを持っていたほどです。

男女共学

旧制の中学校で入学して、途中で新制の教育制度になりましたので、同じ学校に6年間通ったんですけれども、その間に5回も学校の名前が変わりました。いちばん最初が北海道庁立札幌第一中学校、それが北海道立札幌第一中学校になって、それから北海道立札幌第一高等学校附属中学校となりました。そして、北海道立札幌第一高等学校、北海道立札幌南高等学校と変わりました。高校2年になって、北海道立札幌南高等学校になったとき、ここから初めて男女共学になります。高校1年までは下級生がいなかったんですけれども、アメリカ軍の命令で、札幌にある5つの中学校と女学校を全部一緒くたにしまして、地域性で全員を振り分けるということで、高校2年のときに初めて男女共学になりました。わたしのクラスは男が35人くらい、女性が20人くらいというクラスになりました。

札幌市内の男子高等学校、女子高等学校の5校を一緒にして、それを地区別に、札幌東・西・南・北の4つの高等学校に分配したわけです。札幌一中と、札幌二中、それに札幌市立中学、それに、北

北海道庁立高等女学校と、札幌市立高等女学校の5校です。女学校は、「庁立」、「市立」と呼びならわされていました。その5つが、一緒になって地区制で4つに分けられたわけです。そして、市立中学は、廃校になって、啓明中学という、新制の中学になってしまいました。本当の中学校にね。それで、そのごく短い何年間かの卒業生は、東西南北、もじってNEWSの会という同窓会を作っています。ノース、イースト、ウエスト、サウスの頭文字で。

5つの高等学校を4つに統合して、男女共学になったわけですが、それがアメリカ占領軍の命令で強制的に統合させられたということで、われわれは大反対運動、校庭でファイヤーを焚いて、抗議しました。それで、アメリカの、ニブロっていう責任者を追及するとか何とかいって。まあ、わたしはその同じ高校に残っちゃった組なんですけれども、初めて男子高校にまわされた女子学生たちは、怖かったらしい。先生なんかも、わたしの高校2年の、初めて共学のときの先生、本堂先生という、女子高校からこられた国語の先生だったんだけど、本当に緊張してこられたようです。悪いやつは、女の子のいすの下に、かんしゃく玉なんか貼って、バーンといわせたりして、単純といえば単純、無邪気といえば無邪気なんですけれども、やられた人は大変だったでしょうね。

で、わたしは中学から、だいたい、成績が下の上が中の下で、いちばん下ではなかったんですけれども、男女共学になったら一気に上の上になってしまいました。そういういやらしい人ですね、わたしは。女の子の前でやっぱり勉強したのかどうか、勉強した覚えはほとんどないんですけれどね。

中学・高校時代は、けっこう個性的な仲間が多かったように思います。教師にも恵まれていました。

中山周三という国語の先生がおられました。この先生の時間は、毎週1回ぐらい、お相撲形式の漢字書き取りの場所が開かれていました。となりの机同士が相手で、5つの漢字の出題で、たくさんできたほうが勝ち。終わると、1列がひとつずつ移動して、相手が変わる。そしてまた勝負。こ

うやって、8回の勝ち負けで、お相撲の番付をつくる。優勝すれば、次の横綱です。そんな遊びでしたが、上位番付の常連のひとりに、のちの渡辺淳一がいました。わたしもいちおう常連でした。渡辺淳一は、おくてのわれわれより、確実に早熟でした。わたしとは別世界でしたね。かれとは、中学3年、高校1年と同級で、あとはクラスがちがいました。共通点は、どちらも医師志望だったことです。かれは、札幌医科大学にいました。かれの初期の作品には、この中高時代に題材をとったものが多いです。このわれわれの母校は、北海道随一のエリート学校だったようで、500人ほどの同期生に、大学教授が30人くらいいますね。

北海道大学理類入学

それで、当然医者になるというんで、高校を卒業して北海道大学の理類にはいったんです。当時は、医進コースじゃなくて、理類っていうことではいって、2年目にもう一度、その中から選抜して医学部にいくという、そういう感じでした。いまは理Ⅲとかいって、はじめから医進コースですけども、そのころは教養部理類ってことですね。そのときも6倍くらいの倍率でしたけれども、ともかくはいったんですね。

わたしはすごくモラトリアムな人ですから、受験寸前の高校3年の8月に熱が出まして、初期結核ということで、家が医者でしたからすぐに静養を命じられまして、結局8月から11月くらいまで、ほとんど春休みが始まるまで学校にいなかったですね。だから1年くらい浪人するのは当たり前だと思っていたんですが、それが、はいっちゃったんですね。その、はいっちゃったあたりが人生を狂わせたのかもしれないです。

大学では、そのころはまだ角帽です。角帽かぶって、制服を着て、襟もとに「S1」という襟章、理類の1年生ですね、襟章をつけて。けどまだ物が無い時代ですから、日本軍払い下げの軍靴、編み上げ靴を履きまして、ドットンドットンと、学校にいくわけです。

映画研究会

それで、まだ教養課程の授業のときなのですが、北大の正門に入ってすぐの、左側の古ぼけた建物の中に、「映画研究会」という看板がありました。かなり古い建物でした。そこをちょっとのぞいてみて、映画研究会にはいったんです。

そのころの北大の映画研究会は、楡映会という会を組織していました。北大のすぐそばに、エルム劇場という映画館、場末の三番館ですね、それがあって、2本立てで、5日くらいで映画が変わりました。その「エルム劇場友の会：楡映会」というのですが、北大の学生や看護婦さんや、その他北大に勤めている人を、普通にはいると50円のところを30円に割引してくれるというような、金額は記憶がちよっとまちがってるかもしれないけれど、かなり安いお金で映画がみられるっていうことで、そういう会員を1人入れると、映画研究会には、そのころのお金でたしか30円くらい手数料がはいつてくるというので、非常に潤沢な研究会でした。数千人の会員がいましたけどね。

映画研究会の顔で、映画をかなり安くみられました。もちろんそのころはタダではあんまりはいれませんでしたけれども。朝、家から昼飯代50円もらいますと、そのころは50円で昼飯が食べたんですけれども、それでパチンコにいくわけです、パチンコで元を取れたら、それで映画にいく。元を取れなきゃ、その日は諦めるという、そんな感じで映画をみ始めたわけですが、だんだんだんだんだ、映画研究会のボスになっていくにつれて、札幌中の映画館がだいたい顔ではいれるようになりました。

エルム劇場は、もう「こんにちば」ってはいっていけばタダでしたから。それから札幌には名画座という映画館があって、戦前に日本で公開されていた洋画をよくやっていたので、ここにはよくいきました。「舞踏会の手帳」とか、「望郷」、「格子なき牢獄」とかです。いまは戦前の映画も全部ビデオでみられるけれど、そのころはそういう映画をみるなんてチャンスがなかったんです。

映画研究会では、楡映会の潤沢な資金を利用して、レストランで映画の時評会をやったり、機関紙（『しねあすと』）を出したり、淀川長治さんが

来礼されたら囲む会をレストランで開いたり、いろんなことをやりました。わたしは、ジョン・ヒューストンという映画監督が大好きで、「ジョン・ヒューストン論」なんていう青臭い評論を書いていました³⁾。ジョン・ヒューストンは、いまでも大好きでね。ビデオも大半は持っています。いちばん最初にみたのは『アスファルト・ジャングル』という映画で、マリリン・モンローがギャングの情婦役で出ていました。『黄金』というのが非常にいい映画で、これにはハンフリー・ボガードが出ていました。

それからもうひとつ、映画研究会でやったのが、夏休みの巡回映画です。まだ北海道には電気がないところが多い時代で、映画というのはわりと都会的なものでしょう？　それで、東映なんかで作っている16ミリの教育映画と、アメリカ文化センターの記録映画なんかを借りて、映写機を大学で用意して巡回映画にいく。電気がないところにいって、車で電気を起こしながら、小学校なんかで上映会をする。わたしもちゃんと16ミリの映写技師の免許を取って、やってたんですよ。

社会学に転学科

そんなことで、映画の道、できれば映画評論家になりたいなという、大それたことを考えていて、当然授業など出ませんので、医学部になんかいけないわけがない。それで親に背きまして、医学部にいくのをやめて、やめてなんかいったらカッコいいけれどはいれなかったわけで、どこか映画が活かせるところはないかというので、大学の中を調べました。すると、社会学、そのころの社会学というのは哲学科社会学専攻だったんですけれども、社会学専攻に鈴木榮太郎⁴⁾っていう先生がいて、その先生は来るもの拒まず、「受けない」っていうんなら全部入れてくれるという。じっさい、わたしの同級生は、社会学専攻に35、6人いました。

それで、なんとか将来に映画の道を進むには、社会学は活かせるのではないかと考えました。それから、わたしの、小学校から中学・高校とずっと一緒に親友だった赤石義博くんっていうのがいて、彼はわたしより先に社会学にはいっちゃった

わけです。それで「社会学いいぞ。社会学に富川先生っていういい先生がいる」というような話があって、誘ってでもくれまして、社会学にいくことに決めました。

ただ、まあ、その間にいちおう形式として、一度は理類のどこかにいかなければいけないので、理学部の地質鉱物学科へは行って、授業も、まあ、何回か出ました。それで、社会学にはいりました。

鈴木榮太郎先生

そのころ鈴木榮太郎先生はご病身で、結核だったと思うんですけども、よく病院に入院されていて、お見舞いにいったこともあります。鈴木先生の家は大学の官舎で、大学から歩いて10分くらいのところにありました。ご病気ですから、毎日誰かがお迎えにいった、そしてお連れするという、そういう仕事がありました。そして、何回かはわたしもその役をひきうけました。鈴木先生のお宅へおじゃまして、先生をお連れして、北大の電車通りを横切りまして、大学まで来る。ご病気で早く歩けませんので、だいたい40分前には迎えにいった一緒に帰ってくる。

するとそこでいろんなことを聞かれるわけです。「日野くんは地質の出身だと聞いたけど、地質学には地層という概念があるそうだな。その地層と社会階層っていうのはどのようなところがちがうんだろうか」とかね、そういうことをいろいろ聞かれました。どうやって答えたのかっていうのは全然覚えていませんけれども、しどろもどろにいろんなこと答えて……。江別のこともいろいろ聞かれましたし、戦争中、鈴木先生は京城帝国大学の先生をしておられたので、京城の話とかもよくしてくださいました。そうやって、いろいろなことを学んだと思います。

授業はもちろん、出まして、一生懸命ノートを取りまして、いまでもノートが1冊だけ残っています。そのときの授業は、基本的に『都市社会学原理』⁵⁾ですね。特にその最初のところ、方法論とか都市の定義、聚落の概念および都市の概念、それから都市の機能、そういうようなもっぱら理論的なことをお話しになっていました。あとで『都市社会学原理』が出てから、われわれは「ああ、

あのときいわれたことがここに書いてある」と思ったりしましたけれど、そのときはやっぱり、一章一章を、丁寧に、かみくだくようにわれわれに講義をしてくださしまして、われわれは一言一句なるべく聞き逃さないようにノートにとるといような、そういうやり方の授業でした。いま考えると、そのときノートに取ったいろいろなことが、わたしの心の中にあるわけですね。

鈴木先生は、戦前に書かれた『日本農村社会学原理』⁶⁾では、日本の農村をいろいろの角度から調査をされて、その通則性を考察、分析されています。それが、戦後の都市研究では『都市社会学原理』と、「日本」がとれているわけです。おそらく、この都市社会学は、日本だけでなく、ユニバーサルな通則性を考えておられたのだらうと思います。これは、一国社会学の枠を超えた、まさに通人類的な「都市人類学」の態度なのだらうと、わたしは思っています。

鈴木先生は、非常に顔の広い先生でしたから、北大の社会学の2年半のあいだに、えらい先生が集中講義に来られました。有賀喜左衛門先生⁷⁾、竹内利美先生⁸⁾、岡正雄先生⁹⁾、それから馬淵東一先生¹⁰⁾とか、たくさん来られました。考えてみると、そのときに、社会学だけでなく、民族学とか社会人類学の先生にも、けっこう学ぶ機会をいただいているわけです。だから、北海道にいたくせに、わりあいそういう、そのころのえらい先生の授業を聴いています。これは、鈴木先生のおかげというか、ラッキーだったですね。

鈴木理論と札幌のまち

札幌は、そのころまだ都市ができて、100年経ってないわけです。80年くらいときですね。つまり、京都なんかで研究するのはちがう。やっぱり札幌で、都市ができていくところからみられたという特長が、鈴木先生の都市社会学にはあると思います。

たとえば鈴木先生の「正常人口の正常生活」という考え方。これは、いまだったら「正常／異常」なんて差別語だっていわれるところなんだけれども、どういうことかということ、人間の都市の暮らしは、もちろん、複雑、多様だけれど、そこには

多数を占める「正常人口」がいる。そして、かれらには、規則的な、毎日毎日の「正常生活」がある。かれらは、郊外に家を持ち、都市の中心部に職場や学校を持っている。そして、毎朝都心の職場までやってきて、夕方家に帰っていく。これが「正常生活」ということです。この「正常人口の正常生活」というのは、近代都市にすべて通則的な都市的現象であると、鈴木先生はおっしゃっていました。京都の町家や江戸の下町の長屋だったら、そうでない人びともいっぱいいたのかもしれないけれど、北海道の札幌なら、非常にはっきりそれがみえる。

だけど、その人が、たまに「もう今日は仕事にいかない」といって、夕方から出ていって映画をみるなんていうのは「異常生活」なんだということになります。それに対して、もうひとつ、「異常人口」というものもある。これは、夜だけ働いているとか、ヤクザとか、そういうものです。この人たちは、たとえば夜に出かけていって明けがたに帰ってくるというのが「正常生活」である。そういう人たちが、たまに朝早く出かけていけば、それは普通の人にとっては「正常生活」だけれども、その人たちにとっては「異常生活」っていうことになる。

そういう「正常人口の正常生活」というものが、都市の基本的な原理なんだと、鈴木先生はおっしゃっています。これなんかは、札幌だとよくみえるわけです。わたしなんかは汽車通学をしていましたが、汽車に乗れば、学生のほか、札幌に勤めている人が大半でした。学生だって札幌に通っているわけだから、これも「正常生活」なわけです。「正常人口」なわけです。そういうようなことなんかは、札幌だとよくみえると思います。

だから、鈴木先生にとっては、札幌で都市社会学を研究されたというのは、やっぱり意味があった。意味があったというか、都市の通則性みたいなことがよくみえた。はっきりいえば、札幌なんていうのは、明治の初めにできた植民地都市でしょう。何にもないところにできたんだから。石狩川の支流の豊平川のほとりに渡し船があって、何軒かの店がそこにある、といったところが選ばれて、都市建設がはじまったのだから。これは、ア

メリカ新大陸でも同じことで、都市の成立、発展が、遡及的に追跡できる。都市社会学がアメリカで発達したのも、同じようなことなのかな。マックス・ウェーバーなどの都市研究とはずいぶんちがうわけです。

だから、わたしもアフリカの都市をやるとき、何も驚かなかったわけです。

富川盛道さん

社会学には、助手として富川盛道さん¹¹⁾がおられました。この富川さんが、またおもしろい先生でした。もともとはこれも京都の医者の子で、いままだ、弟さんが大宮の大徳寺のそばで病院をやっておられますけれど、大阪医専、いまでいうと大阪大学医学部ですね、そこを出て、当然医者になられたわけです。だけど、親のあとを継ぐ気はないというので、大阪医専にはいられたころから、京都大学の今西錦司先生¹²⁾とか、ちょっと先輩の梅棹忠夫先生¹³⁾とか、川喜田二郎先生¹⁴⁾とか、そういうグループにコミットしてきたようです。そこで、のちに専攻も、精神医学を選ばれたのです。そして、16歳のときに（1942年には、18か19では？）、今西先生以下の大興安嶺探検隊¹⁵⁾に参加されました。大興安嶺では、市原実¹⁶⁾さんという、のちに大阪市立大学で植物学の先生になれる方と、2人でウマにのってまわり、ナプタルダイという未踏峰に登ったり、オロチオン族の聞き取り調査などをされたそうです。

そのころは、今西先生も含めて、岡正雄先生とか、泉靖一先生¹⁷⁾とか、梅棹忠夫先生とか、そのあたりの夢は、中央アジアだったんです。中央アジアをともかく調べたいと。ですから、西北研究所¹⁸⁾というのができて、そこに今西先生とか岡先生とか、みんないていたわけです。富川さんも、そのころは中央アジアを夢みていたようです。ところが戦争に負けまして、日本人が中央アジアをやるなんて夢はかなえられなくなったわけです。そこで、今西先生たちはアフリカへ、それから泉先生なんかは南アメリカにっていうようなことになったんだと思います。

それで、富川さんは、独力でマリノフスキー¹⁹⁾やラドクリフ＝ブラウン²⁰⁾、ファース²¹⁾やエヴァ

ンズ＝プリチャード²²⁾など、たくさんの原語の文献を読んで、社会人類学者になろうと決心されたようです。

ちなみに、富川さんはたいへんな読書家で、ほんとうに、広い範囲の本を読まれていました。いま、京都市立大学の図書館にはいつている富川さんの蔵書をみてください。その興味の範囲の広さを感じられるはずです。冬など、朝、先生のお部屋へ起こしに行くと、まだ、眠ってらして、枕元には、何冊もの本が積まれていて、先生の布団の上には、窓の隙間から入った雪がうっすらとつもっているというようなこともありました。下宿の部屋中、また研究室中、ともかく本でいっぱい足踏み場もないという感じでした。いつも、丸善や、いろいろの書店の請求書が机の引き出しにいっぱいでした。わたしは、この部分の能力だけは、まったく引きついではいません。

だけど社会人類学者になるといっても、まだ、日本には社会人類学なんてコースは全くありませんので、富川さんはともかく、親に背いて、医者として開業したり何したりっていうのは全く考えないと決心した。それで、「北海道にいてアイヌをやろう」っていうことになって、北海道大学の心理学科にはいるわけです。魚の心理とか、そんなようなことを研究されていたようですね。結城錦一先生²³⁾という音響心理学で非常に有名な先生とか、梅岡義貴先生²⁴⁾、この先生はあとで東大の教授になりましたけれど、そういう先生たちがいるころの心理を出て。そして、アイヌをやりたいっていうことで、知里真志保先生²⁵⁾、アイヌの方ですけども、その先生が「1年間しか期限がないんだけど、助手になるか」ということで、助手になるんです(文学部アイヌ語アイヌ文学研究室)。で、1年間、知里先生の助手をしているときに、鈴木榮太郎先生が「社会学にこないか」っていうんで、富川さんを社会学の助手にしたわけです(文学部社会学研究室)。

そのころのことを、赤坂賢さん、富山大学で富川さんの同僚だった人ですが、かれがこういうことを書いています。

「最後に言及しておきたいのは日本でも戦後いち早くトンプクトゥに着目した研究者があったこ

とだ。一人は北海道大学の富川盛道助手(当時)で、マイナーの原書を入し鈴木榮太郎助教授(『都市社会学原理』の著者)に要旨をレクチャーしたという。富川氏はその後アフリカの地域人類学を構想し日野舜也氏をアフリカ都市研究に導いたいきさつがある」²⁶⁾。

それからもうひとつ、クーランジュ²⁷⁾の『古代都市』²⁸⁾っていう本がありますよね。あの本も「ぜひお読みください」と鈴木先生にすすめられたそうです。

鈴木先生の『都市社会学原理』のなかには、トンプクトゥのことは一言もでてはきません。しかし、少なくとも、鈴木先生ご自身がアフリカの都市や国民社会に大きな関心をもっておられたことはたしかです。わたしがアフリカに出かける前にご挨拶にうかがったとき、鈴木先生は、「日野くん、アフリカの国々は、数年前に独立をはたして、これから国民社会を作っていく初期の過程にあります。そこで、都市がどう機能するのか。どんな国民社会ができるのか。いい機会だからよくみてきてください」とおっしゃいました。わたしも、その宿題を胸に、アフリカでのフィールドワークをおこなってきたつもりだし、いまでもその宿題は忘れていません。ただ、わたしが2年後に帰国したとき、先生はすでに不帰の方となられていました。

アイヌ調査

富川さんとのプライベートな最初の出会いは、わすれられません。冬の寒い夜、わたしは、おなじ社会学のある友人と一緒にお酒を飲みまして、真夜中の2時ごろに、その友達の下宿に泊まるというので、北大のへりをずうっと歩いてたわけです。そのころの北大の文学部の教室はずうっと道路に沿ってまして、その中に一箇所だけ電気のついている部屋があるんです。「あれは誰の部屋だろう?」、「富川先生じゃないか?」っていうことになって、2人で廊下に忍び込みました。そのころの北大はひどいもんで、木造建築ですからこの窓でも外からはいれるわけです。で、コンコンと叩いたら、富川さん、あの人すごい頭痛持ちで、「お前らもんでくれ」というんで、朝まで2人

で、頭や肩をもんだりしたんですけどね。その後、富川さんのところによくそうやって、夜に出かけていってというようなことが起こってくるようになりました。

そしたら、あるときに富川さんが「おい、日野くん、来週、アイヌの調査に出かけるんだけど、どうだろう。きみ、身体が空いてるかい」というので、「もちろん空いてます」ということでくっついていったのが、わたしにとっては、初めて、アイヌのところへいくことになったわけです。まだそのころ社会学の3年生だったと思うんですが……。2年生の後半から社会学にはいるわけです。その冬ですよ、寒いときに、富川さんに会ったわけですから。そして、春に富川さんについてアイヌにいて。その年は、たしか、富川さんと、そのころ助手に布施鉄冶さんっていう人がいたんですが、その2人を中心に学生12、3人がついて、夏休みにアイヌ村落の調査にきました。

そのころ、もう、かなり緊張が高いですから、そこでフィールドノートを取るわけにはいかないわけです。で、その場では一生懸命耳で聞いて頭の中に入れるわけです。そして、「どうもありがとうございました」って、帰ってきたらそこらの物陰で必要なことだけタカタカタカッとメモするんです。そのころから、わたしは、フィールドノートを聞きながら書くということが比較的になりました。これは、やっぱり訓練だったと思います。

富川さんのアイヌ研究は、従来の研究者がやってきたような、アイヌの身体的特徴とかいった自然人類学、あるいは、熊祭りとかカムイノミといった民族誌的研究でもない、オーソドックスな社会人類学的な研究でした。平取²⁹⁾という、もともとひとつのアイヌの村、昔のコタンですね。沙流川沿いの二風谷よりひとつ下ですが、そのコタンに和人の運びとも移住してきて、アイヌの人にお酒など飲ませて、だんだんとアイヌの土地を篡奪していくということになりました。そこで、明治以来の聚落の変化を、アイヌと和人の関係にしぼって、通時的に調べられていました。富川さんが調査をされていたころは、まだ、口元に入れた墨をしたアイヌの老女たちのご存命で、わた

しも、そういうおばあちゃんに話を聞きにきました。

アイヌ村落に基督教がはいって、近代的な自我が覚醒した明治の末期から大正にかけて、アイヌの自殺が一時期飛躍的に増加します。その経緯を丹念に追求して分析された、『アイヌの自殺について』(1959)が、富川さんの医学博士論文です。この調査の末期には、わたしもすこし参加しました。それは、ほんとうに北海道の厳冬期だったのですが、北海道大学の図書館にこもって、明治期から昭和初期にかけての『北海タイムス』(『北海道新聞』の前身)の記事を年代順に検索して、アイヌだけでなく、あらゆる自殺、他殺の記事をぜんぶ洗い出すという仕事でした。2カ月以上かかったと思います。これで、博士論文の副論文である、『アイヌの他殺について』の資料も作ることができました。まさにオーソドックスな社会人類学の手法でやられたアイヌ研究は、あとにも先にも、これが唯一といっても過言ではないとわたしは思っています。

ただ、残念なのは、その後、富川さんがアフリカ研究に転身されたことと、ご病気がちで、それから、たいへん慎重にじっくりとものを書かれる完全主義者で、当然遅筆で、いまでも、この当時のたくさんの書き散らしの原稿は残っているのですが、ご本人以外には、再構成はまったく不可能のままになったことでした。40年前、岩波新書にアイヌのことを書かれるというので、たぶん、脱稿寸前までいったはずなのですが、この原稿はみつかっていません。そのほか、『民族学研究』用の「アイヌのチャランケについて」という未完の草稿も残っています。ご健康だったら、まだまだいろいろな研究成果が出せたのにと、残念に思っています。でも、生涯、自分が納得できない不完全な論文は絶対に出したくないという、完全主義を通されました。この気質も、わたしはぜんぜん引きついではいません。

都市調査

北大の鈴木先生のところでは、鈴木先生が組み立てた都市社会学の理論をもとに、実際に、資料として説得的なデータを集めるという時代にはい

り、当時、鈴木先生の助手であった笹森秀雄さん、富川さん、布施鉄治さんたちがその役割を担いました。そして、われわれもその末端に参加しました。『都市社会学原理』でいうと、都市の交流圏とか生活圏といった社会圏の設定、都市における諸集団の実態、都市の人間関係や贈答などの社会関係の実態、そのあたりの鈴木先生の壮大な理論の実証的基礎データの収集です。

どういうことをわれわれが手伝ったのかというと、たとえば、札幌の中心街にあるお風呂屋さん、札幌の場末の行啓通りという繁華街、まあ京都でいえば、大手筋みたいなところにあるお風呂屋さん、その両方の前に立って、来る人びとに、どこから来たのか、住所を聞くわけです。それから、同じようなことを、繁華街を通りかかった通行人にも聞くわけですね。そんなことが、「正常人口の正常生活」の確認につながるなんて、そのころのわたしはまだよくわかっていなかったのです。

それから映画館の観客調査もやりました。そのころは、札幌の中心街には、いわゆる封切館が、そして場末には、三番館といわれる映画館がありました。さっきのエルム劇場もそのひとつです。で、三番館っていうのは、基本的には、ほとんどが日本映画を2本立てでやる。それをどういう人たちがみにいくのかというと、近所のおばさんたちなんです。近所のおばさんたちが買い物の帰りに、大根なんかぶら下げたまま、20円か30円のお金で、美空ひばりの映画なんかをみるわけですね。もちろん2本立てでも、2本みる時間なんてありませんから、たいてい1本くらいみてスッと帰るわけです。そういう映画館がものすごく全国的にあったんです。そこと、中心街の映画館で、そこに来る人がどこから来てるのか聞くという調査ですね。

それから、札幌と隣接するまちに通じる道に沿って、一軒一軒歩いて、どういう買い物はどこでするかというのを聞く。そうすると、大きな買い物は札幌で当然買うわけですが、毎日の野菜なんかを買うのに札幌にいく人なんかはいないわけです。札幌に近ければいくわけですが、どっかで途切れるわけですね。そんなことをずうっと聞いて歩くとかね。ともかく、『都市社

会学原理』の基礎的なデータになる部分のお手伝いをしました。

そういう調査を、助手の諸先生に、われわれ学生たち20人ぐらいがくっついていて、その指示に従って聞き込みをするわけです。もちろん新参のわたしは、その全部に参加したのではありませんが^{§30)}、そのいくつかへの参加は、まちがいなく、大きな理論の実証のための、細かい、末端の基礎的検証に参加できたわけで、わたしの将来の研究方法に大きな示唆を与えたのはまちがいありません。これは、のちに、アフリカの小さなまちで、1人で孤独のフィールドワークに従事したときの大きな力になったのだと思います。

第1回目の映画調査

ただ、そのときには、わたし自身は映画の方に興味を持っていましたから、とにかく映画館にいて、映画をみることが、わたしの大事な仕事だと、自分では思っていましたからね。そのころみた映画は、いちおうメモがありますけれども、1年に400本くらいはみにいってますね。どっかで7本立てなんかいうのをみたことがあります。朝から夜までね。

よくみた映画といえば、どちらかといえば洋画が多かったのですが、ほとんど、無差別という感じで映画館にかよっていました。とくに、名画とか、評判のよいものだけを選んで、などということもありませんでした。わたし自身の卒論のテーマが「都市家族における映画の社会的機能」ということで、そのころは、おばちゃんたちが大根ぶら下げて美空ひばりの映画をみにいくというくらいですから、まあ、そういう映画もみました。だから、おばちゃんたちと映画の話をしたときに、「どの映画みた？」といわれると、ほとんどわたしはみているわけです。そうすると、場面場面でいろんなことを聞けるわけです。たとえば、「あそこんとこで、ひばりが、親に会ったでしょ？」とか、「あんとき、どう思った？」とかね。そういうインタビューをかなりしました。

『都市人と映画』という報告書が出たのは、1957年（8月）です。これはわたしの卒業する年なんですけれども、この年に映画の調査をやりまし

た。1 回目の映画の調査ね³¹⁾。これは富川さんを中心にやったのですけれども、もうそろそろ、札幌でのテレビの普及率が4～5%くらいのところです。「これから映画はどうなるのだろう？」という危機感を持った、札幌の映画館主の団体である札幌映画協会の依頼で、実態調査をやることになったわけです。われわれは、向こうが知りたいことと、われわれが興味をもっているところを組み合わせまして、クエッションネア（質問票）を作りました。そして、いまは不可能ですが、そのころは可能だった、札幌市の住民の住民票をサンプリングしまして、調査の対象者をきめ、お願いをして、直接面接にいくわけです。その対象者の映画やテレビ観覧の実態、意識や意見をインタビューして、そのデータを集計、分析して、作成したのがこの報告書です。

この中で、富川さんが展開した理論としておもしろいのは、映画をみるというのは一連の行動の束だっていうのです。つまり、まず、「情報行動」というのがある。「いま、どんな映画をやっているだろう？」、「どんな映画がおもしろいだろうか？」。そのころは、新聞のほかに『平凡』とか『明星』、『映画ファン』とか、いろんな情報を提供する雑誌がありました。それから、次に「選択行動」がある。つまりどの映画をみるのか決める。そして、実際にどの映画をみるのか。これが、「観覧行動」です。そのあとに、「あの映画はよかった」とか「つまらなかった」といった「評価行動」がある³²⁾。そういう映画をめぐる行動の通時的な束に沿って、クエッションネアを組み立てていく。当時、日本社会心理学会の年報で、高い評価を与えられたそうです。

そこで、だれと映画をみにいくのかということ、若い人は友達と、つとめている人は職場の人といく、あるいは一人でいくということになるし、家族でいく比率が高いのは、主婦や自営業ということになります。当然といえばそうだけれど、ほぼ予測した結果が出てきます。

いっぽう、テレビが出現すれば、どういう人が映画をみなくなるかといったことも予測されます。三番館で美空ひばりや中村錦之助の映画を買い物ついでにみていた主婦は、家にテレビがあれば

ば、まっすぐ帰ってテレビをみればよいということになります。ですから、この調査で容易に予測できたのは、テレビが普及すれば、いわゆる三番館の客足が落ちる。それにくらべて、封切館や一番館の客は、デートのためとか、テレビではみられない映画をみたいという人々であって、それほど客足は落ちないだろうということになります。じっさい、のちに、いちばん客足が遠のいたのは場末の三番館で、その多くが、テレビで上演できないポルノ専門館になりました。

そういうことを分析した理論が、マスコミと家庭との関係理論です。つまり、新聞や雑誌などの「持ち込みメディア」、ラジオやテレビなどの「訪問メディア」、映画や演劇などの「招待メディア」という機能分類の理論です。これによれば、家庭の主婦は、充足できる情報や娯楽を提供する訪問メディアが家に訪ねて来てくれれば、べつに映画館のご招待を必要としないことになります。いっぽう、好意を持った恋人とは、家でテレビをみましようということにはならず、立派な施設を持ち、娯楽を提供するロードショウへご招待しようということになります。

こういう、いくつかの理論が、この調査を成功させることになりました。札幌映画協会には、つらい結果になったわけですが、これも、社会の文化変動からいえば、当然のことになるわけです。

卒業論文「映画の社会学的研究：都市家族における映画の機能を中心に」

その中でわたし自身は、家族といくというのに意味をみいだしたわけです。そのころ、まだテレビはそれほど普及していませんから、子どもたちを連れて、土曜日とか日曜日とかに連れ立って、映画館にいった、映画をみて、そのあと食事を一緒にして帰ってくる。その間ずうっとみた映画について、「おもしろかったね」とか何だかんだとしゃべって帰ってくる。そういうことを日常的にみてましたんで、わたしの卒論のデータはそういうものを使いました。

そのころ、日本の文化人類学で非常に流行ったのが、文化とパーソナリティの研究なんです。つまり、パーソナリティを決めるのは文化だとする

視点です。文化人類学の研究方法に、心理学的な手法を取り入れようということです。文化人類学の研究史からいえば、進化理論、伝播理論、機能理論に次ぐ、アメリカではじまった新しい動きだったのだと思います。そのころの『民族学研究』には、「文化と育児様式」とか、「国民性」とか、「モータルパーソナリティ」とか、そういう論文がたくさん載っていました。また、出版事情がいくらかよくなって、ミード³³⁾、ベネディクト³⁴⁾、クラックホーン³⁵⁾などの翻訳もずいぶん出版されるようになりました。

日本では、祖父江孝男³⁶⁾さんとか原ひろ子³⁷⁾さん、そして、京都の藤岡喜愛³⁸⁾さんとか富川さんとか、たくさんの研究者が輩出しました。そのときに、パーソナリティを知る投影法、つまり、ロールシャッハテストとか、TATとか、文章完成法とか、あるいはフロレンス・クラックホーンの価値志向調査法とか、そういう心理学的テストを文化人類学の研究に応用できるのではないかということになります。わたしも、片口安史³⁹⁾さんや富川さんに学んでいろいろな投影法を身につけ、病院での心理テストや知能テストのアルバイトもできるようになりました。いまは、すっかり忘れちゃったけれど。

わたしは、卒論にはTATを使ったのです。ロールシャッハではなくてTATを使って、それぞれの人のパーソナリティと、映画をみたあとの、家族における評価行動をこまかく聞いて、分析しました。そのころの映画のほとんど全部をわたしはみておりますので、対象者のみた映画の大半について、「あの場面でどう感じましたか?」、「あの場面について、ご家族で何を話し合われましたか?」などと、場面に応じて具体的に聞けるわけです。いま仔細に考えるとまちがっているかもしれませんが、とにかく、ある映画を家族でみて、家族で話し合うことによって、ものの考え方が変わるところと、むしろ、自分たちが持っている偏見や思い込みを家族で確認しあってしまうところもありうるのではないかと、わたしはおぼろげながら考えていました。そんなテーマでわたしは卒論を書いています。いま考えると、実は、それは、多くの人のびとが、アフリカや東南アジア

などに旅行に出かけて、かえって自分が持ち続けていた偏見や思い込みを確認して帰ってくるという、異文化接触の問題点にも共通することなのかもしれません。「映画の社会学的研究：都市家族における映画の機能を中心に」という、そういう卒論なんです。

そのころは、いまみたいにパソコンなんかありませんで、全部、原稿用紙にペン書きです。400字詰め、150、60枚ぐらいかな。もともと、わたしの卒論は、最後に、論文中でとりあげた映画のストーリーをつけたんです。だいたい、取り上げた映画ひとつにつき1頁ぐらいで。1頁もないかなあ、200字ぐらいのストーリーを書きました。まあ、それだけで十数枚になってますけれどもね。ただわたしは、実は自分の卒論の成績をみてないんです。卒業できたのは確かですけれども、自分の卒論が優だったか良だったか可だったか、全然わたしはみていない。記憶もない。ともかく、通りました。

わたしがその卒論を書いた年が、1958年。昭和33年ですね。北大に52年にはいって、卒業まで6年かかりました。医学部にいこうと思ったのは1年ぐらいで、映画ばっかしみてました。社会学に実際いたのは2年半ですから、あとの3年ぐらいは、医学部にはいり損ねて理学部にいて、いちおう授業は受けてて、もちろん単位は一つも取りませんでした。それで、社会学にいったんで6年かかりました。

わたしの卒業する年が、ちょうど鈴木榮太郎先生の定年の年。それでその年に、鈴木先生が定年になるというので、日本社会学会が北大でありまして、わたしもその手伝いなんかもしました。そのときにね、有賀喜左衛門先生とか、竹内利美先生とか、いろんな先生たちを、アイヌの踊りをみに、平取という富川さんのフィールドまでお連れするというのもやりました。

大学院に進学

そして鈴木先生はおられなくなっちゃいます。だけど、大学院は受けました。3人受けたんですけど、はいったのはわたし1人。あとの2人は英語で、いわゆる足切り。そのころは、英語で60点

取れないとそれだけで自動的に落とすというような、そういう大学院だったんですけど、わたしだけはいったんです。

で、はいったんですけれども、1人でしょう。わたしの前の年に1人、その前の年に2人かな。ともかく、大学院の学生は非常に少なかったです。わたしがはいった次の年は1人もはいらず、その次の年に2人はいったのが、のちに富川さんやわたしとアフリカに一緒にいくことになる、富田浩造⁴⁰⁾と和田正平⁴¹⁾なんです。この2人が大学院にはいつてきました。

わたしが、社会学の卒業間際、なにかの用で東京へゆく青函連絡船のなかで、偶然、富田浩造に出会います。わたしも、富田も教養課程は同クラス、そしてわたしより2年くらい遅れて、おなじ社会学に進んだのですが、わたしは映画、かれはバスケットボールに熱中していて、教室で顔を合わせたことがなかったのです。「おまえが、話に聞いている富田か」、「おまえが日野か」ということで、そのまま、青森から満員の東北本線に乗り込み、座席がないので、食堂車に陣取って、半日おしゃべりをしました。それが、富田との出会いです。

その縁で、わたしは、のちに、富田の卒業論文の作成のために、かれの故郷の埼玉県、秩父の山村である三峯村落の調査の手伝いに行くことになります。三峯神社の宿泊施設に3週間泊まり込んで、ときには、宮司の宮沢さんの晩酌のお相手をしたりしながら、毎日、村落を訪ねてインタビューをやり、また、大滝村の役場へ通って、明治7年の壬申戸籍以来のこの村落の廃籍簿をたぐって、全戸の姻戚関係をしらべました。のちに、わたしが、文字記録のないアフリカの村落で、聞き込みによって、同じような姻戚関係を調査することになるとは、そのときは考えてもいませんでした。いずれにしても、ほとんどが、村落内婚である、この村をしらべたのです。これは、富田浩造の卒論になりましたが、わたしも、「日本山村の生態：ネガティブ・デモクラシー」というタイトルで、学会報告をしています。

わたしにとっては、北海道を離れて、初めての本州調査、わたしからいえば初めての「内地調査」

ということになります。毎日のように、三峯山村の民家で、オメン（お麺）を打ってもらって、ごちそうになるというたのしい調査でした。なんといっても、わたしの貴重な本州での初調査でした。北海道の開拓村落とのちがいを、身をもって経験したのです。また、本が破れるほど反復して読んだ、きだみのさんの『気違い部落周遊紀行』の雰囲気をかいま見ることでもできたのです。

關清秀先生

それで、大学院にいちおうはいったのですが、鈴木先生はおられません。社会学には、助教授で、アメリカ留学から帰られた關清秀⁴²⁾先生がおられました。關先生は、アメリカで都市人口学を学んでこられた先生で、離婚した家族とか、片親の家族とかを、正常な家族に対して、崩壊家族と定義して研究されていました。それは意義ある研究だったと思います。この先生の下で、わたしはアメリカの都市生態学や都市社会学の文献をがっちり読まされ、よい勉強ができたと思っています。ただ、北大に來られる前には、経済企画庁かどこかにおつとめだったそうで、ちょっと官僚的なところがある先生でした。

そのころ、北海道は知事が革新だったんで、中央政府がそれを嫌いまして、北海道庁の他に、北海道開発局という政府直属の機関を作りまして、北海道の開拓はそこでやるというふうになってました。その開発局と關先生は非常に関係が深かったので、北海道のいろんな開拓村落の調査を頼まれて引き受ける。で、引き受けると当然、先生自身も助手もいますけれど、基本的には学生を連れていくわけです。そのころ大学院には、わたし1人しかいませんので、結局、わたしが若者頭みたいになるわけですね。それで、3年4年の学生を、「お前ちゃんと聞いてこい」とかいつてやるのが、わたしの仕事でした。当然、報告書の一部は書かされます。まあ、いまでもいくつかありますけれどもね。

だけど、そのときに困ったことがおきたのです。關先生は、鈴木先生がお辞めになっても、すぐに教授になれなかったわけです。教授になるのに3年くらいかかったと思います。だけど、大学

院の指導教官っていうのは、教授でなければならぬ。

井上修次先生

それで、井上修次⁴³⁾ という人文地理学の先生が、わたしの指導教官ということになりました。

この井上先生には、実はわたしはものすごい不義理をしていて、会わせる顔がなかったんです。というのは、わたしが北大には行って、まだ教養のときに受けた人文地理学の授業で、夏休みに何か調査をしてレポートを書けということですね。で、わたしは、札幌の郊外に豊平というまちがありますが、その中心街の月寒について調べたいとあったのです。豊平は、いまは札幌市の一部になっていますが、通りに面したその中心街の月寒が、農村市街地から都市的集落に形成されていくなかで、農地が宅地化され、都市化していくにつれて、土地の所有形態がだんだん細分化されていくだろう、そういうことを調べてみたいとあったのです。そしたら、知らなかったんだけど、その井上修次先生というのは、地割の研究で日本では非常にいい仕事をされていたんです。それで、喜んでくださいますして……。「いままで、わしがこの大学で7、8年授業して、お前ほどおもしろい話をもってきた者はない」と。で、「きみ、何という名前だ?」と聞かれたものだから、「日野っています」と答えたら、「日野くん、覚えてるよ。わしの北大入試の人文地理の試験で、50点満点で48点もとったのはきみだけだ」。そんなこといわれてね。すごくおだてられた。「ぜひやりたまえ」といわれたのに、やらなかったんです。やらないで、結局レポート出さずじまいで単位も取らないで、いたわけです。それで、マスターにはいったら指導教官になったんです。

そしたらね、井上先生はそれを別に恨みにも思っておられなくて、「お前よく来た」っておっしゃるわけです。それで、井上先生が指導教官ということになりました。

井上先生の授業は、毎度、ようするに人文地理学というのはいかにすごい学問かっていう話なんです。たとえば、かれの先生は、ギリシャの地理を研究していたのだけれど、ギリシャの地図の大

きいもの、いまも地球儀などにありますが、高地は出っ張り、平野は平らになっている地形図をつくらせ、いつも暇があると、それを眺めている、そして、いろいろ発想するというわけです。そして「おもしろいだろう、日野くん」というわけです。本当に楽しい、おもしろい授業でした。

それに、この井上先生は、手相を見る特技をお持ちで、私の手相を見られて、「君は頭がいいね。でも、努力というものをすることがない。惜しいね」なんていわれました。頭の善し悪しは別にして、後のほうはずばりですね。

この井上先生から、わたしは地理的なものの見方みたいなものをかなり教えられました。だから、梅棹先生がわたしのことを、「日野くんをつくったのは、鈴木榮太郎と地理学だ」とおっしゃったことがあります。

マリノフスキーとマイナー

だけどね、大学院ではもう、映画で論文書くというわけにはいきませんでしたね。卒論を映画で書くことは、鈴木先生だからできたけれど、その2人の先生のところでは、わたしは映画で論文を書く自信がなくなって……。まあ、もうひとついえば、わたし自身がそのころには映画からちょっと卒業してたのがあるかもしれません。

それで、マスターにいる間に、富川さんのアイヌの調査にはよくついていきました。それから、富川さんに薦められて読んだのが、マリノフスキーです。トロブリアンド研究関連のものは、そのころすでにかなり邦訳がでていましたけれど、まだ翻訳されていなかった、「The Dynamics of Culture Change」、『文化変動の動態』。この本なんか一生懸命英語で読みました⁴⁴⁾。これは、アフリカの話なんです。わたしの修士論文の骨子になりましたし、また、あとから考えれば、のちの、アフリカにおけるわたしのフィールドワークの基本的な方法にも結びついています。

それともうひとつ、富川さんが「きみ読んどきたまえ。アフリカと北海道はだいたい同じところに植民地になったろう。わしの知ってる限り、アフリカの都市をやってる研究がずいぶんあるよ。そういうのもね、きみ、北海道の都市やるのなら勉

強になるはずだ」ということで薦めてくれたのが、ホーレス・マイナーの“The Primitive City of Timbuctoo”という本です⁴⁵⁾。これも、富川さんが北大社会学の図書館に購入しておいてくれたのでした。そして、この本を富川さんが鈴木榮太郎先生にも推薦したということは、うかつにも、赤阪賢くんが今回、『都市的なものの現在』に書くまで知らなかったのです。

いずれにしても、アフリカとわたしの出会いは、マリノフスキーとトンブクトゥだったわけで、その結びの神は、もちろん富川さんだったのです。

めぐまれた研究環境

先にもふれましたように、助教授だった關先生は人口学の先生でした。都市人口学なんです。だから、アメリカのいわゆるヒューマンエコロジーとかアーバンエコロジーとか、そういう本をゼミで読んでました。これも、役に立ったと思います。それともうひとつ、富川さんと並んで一緒に助手だった、笹森秀雄⁴⁶⁾さんという方がおられました。この方は、バージェスやパークなどシカゴ学派の先駆者の研究をされている都市社会学者でした。そして、北海道の都市の研究もされていました。また、もう一人の助手であった、布施鉄治⁴⁷⁾さんは、労働社会学を専門にされていましたが、関心の分野はたいへん広く、かつ、根っからのフィールドワーカーでした。早世されたのですが、たいへん元気のいい、ブルドーザーのような先生でした。そういう人たちにくつついて、わたしも北海道のアイヌの村落や、開拓村落の調査にいきました。やっぱり、そういう点では、そのころの研究環境はすごくよかったです。というのは、なんせ先生の方が多くいますから。だから私はどの授業にいても1人、あとになっても2人か3人か、っていうことで。

特に富川さんの部屋には、場合によっては泊り込むくらいでいました。アイヌの調査にいけば、知り合いの民家で泊めてもらったり、2人一部屋で寝るわけです。2人で「もう今日は仕事したくないな」、「やめましょうか」とか言って、昼まで寝てたこともあるけど。とにかく、そういうこ

とを、四六時中、学んでるわけです、いろんなことを。学ぶって別に、勉強の話ばかりしてるわけじゃありませんよ。一緒に流行歌歌ったり、映画の話したり、何なり。

富川さんは、アイルランドの映画が好きでね。アイルランドの映画っていうよりか、アイルランドを扱った映画、たとえばジョン・フォードの『わが谷は緑なりき』とか、そんな映画なんかをよく話してくれましたね。そのとき富川さんから聞いて印象深かったのは、アラン島の話です。シングという詩人が『アラン島』というのを書いてるでしょう。岩波文庫で出ていますよね。また、いまはビデオになっていて入手可能で、この大学のわたしのコレクションのなかにもありますが、そのころは映画でしか見られなかった、アメリカの有名なドキュメンタリー映画作家、ロバート・フラハティ⁴⁸⁾が撮った『アラン』という記録映画があります。これは、当時、井上先生の人文地理学の授業ではじめて見せてもらったと思います。アメリカ占領軍の文化センターに在庫がありました。このアラン島の話などを、富川さんは話されるわけです。アラン島の人びとが小舟を操って海にこぎ出してゆく話とかね。アイルランド文学とか、ブロンテ姉妹の話とか、そういう話もよく聞かされました。わたしは、そういう話には弱かったのですが、そういうことをよく知っておられて、情熱をこめて語っておられました、富川さんは。

それから、お酒がはいると、「流れ流れて落ち行く先は……」とか、「やると思えばどこまでやるさ……」など、いろいろな流行歌をよく歌われました。とくに富川先生が大好きだったのは岡晴夫の『青春のパラダイス』。いまも私の愛唱歌のひとつです。

修士論文「文化変動の力学的側面」

そうそう、マスターの2年の夏休み（1959年）に、再びわたしは熱が出ます。モラトリウムです、また。で、大学にいかないわけです。

その次の年（1960年）の春に、富川さんが中心になって、「北大・京大北海道雪上車調査隊」という計画ができるわけです。この計画は、ひとつは、自衛隊の協力で、雪上車を借りて、根釧原野から

北海道の北端の稚内まで、厳冬期の北海道のオホーツク沿岸部を駆け抜けようということでした。これには、そのころ朝日新聞社北海道支局におられた本多勝一さんも加わっていました。そして、それと同時に、根釧原野には、世界銀行の援助で計画されたパイロットファームという開発計画がありまして、その開拓社会の調査をやるということでした。これは、北海道の根釧原野に、そのころ日本は貧乏ですから、世界銀行から金を借りて、1軒の家、だいたい12町歩くらいの、画期的に広いところで牧草を植えて牛を飼おうという計画です。しかも、牛はそれまで日本で飼われていたホルスタインとかではなくて、ジャージーというミルクの非常に濃い牛を飼おうということになります。そういう計画的に作られたパイロットファームが根釧原野にできるわけです。最初のグループが昭和31年、それから32年、33年。それまでが第一床丹という時期で、第二床丹ってというのが37年くらいまで。その共同調査をやるということでした⁴⁹⁾。

だけどわたしは病気になるちゃって、調査にはいけないっていうことになりました。そして12月になりまして、だけどやっぱり卒業するしかないなと思ったんです。卒業してドクターにしようと思ったからね。

それで、まず井上先生に相談にいきました。「大丈夫かい」「はい、大丈夫です」「そんなら書いてごらん」って。もう一人の關先生のところに行ったら「書けますか？」っていうのね。「締め切りは1月の16日か何かですよ」っていうわけ。「書けますか？」っていうから、「いや、まあ、書けるか書けないか、ダメなら諦めます」といって、そのときに書いた論文が「文化変動の力学的側面」です。

これは全く、理論です。基本的には、マリノフスキーの“The Dynamics of Culture Change”を下敷きにしています。マリノフスキーの本は、アフリカの植民者側の政策と植民される側の文化とがどういうふうにかままっていくかという、そういう本なんです。

この論文はどういうことを書いたかというのと、まずいちばん先に、「力」という字のつく言葉を全

部探してみたんです。辞書から。「能力」とか、「魅力」とか、「影響力」とか、「出力」とか、たくさんあるでしょう。あれを全部挙げてみて、いかに人間の文化を語るのに力ってというのが使われるかっていうところから始めたんです。そして、人間の文化というのは、その人間が組織的に行動して支えなければ支えられないと。たとえば、一つの石ころがある。ちょっとおもしろい形の石ころでも、それだけじゃただの石ころでしょう？

それを、神社の本尊にして祀ろうと、その人たちが組織的に行動すれば、それはただの石ころから文化的なものになる。そしてそれは、その人たちが毎年お祭りをやって支えれば続くけど、もしその人たちが1人もいなくなっちゃって、だれも組織的行動で支えなくなれば、もとの石ころになってしまうはずだ。そういうふうには、人間の文化というのは、それを支える人の組織的な行動がなければ保持できない、維持できない。そしてそれが変わっていくには、かれらの組織的行動がなければ変わらない。そういうことを、書いたんです。

關先生には低い評価点しかもらえなかったけれど、これも実は、わたしは、優か良かみてないんです。けれども、もしかしたら修士論文は成績つかなかったかもしれない。合格だけだったかもしれないけど、とにかく合格はしました。

きびしかったドクター進学

修士論文を、1月の20日くらいだったかな、書き上げました。で、そのころちょっと身体の調子がよくなって、医者である親から「もう、学校いっていい」っていわれたんだから、まあ、そこで回復したんですよ。そして、その修論を書き上げて、パイロットファームの調査のときは、わたしは留守番でした。いちおう、その計画の事務局長みたいな形で。

で、北大と京大ですから、梅棹忠夫先生も参加したわけです。それでわたしは何をしたかという、梅棹先生を駅までお迎えにいった、宿を決めて、そこにお泊めして、次の次の日かに、根釧原野に送り出すという役割をしました。

その、梅棹先生を迎えにいった日と送り出す日

の間の1日が、わたしのドクター論文の入試でした。それで、もう、梅棹先生の世話はそこそこに飛び出しまして、ハアハアハアハアって会場に飛び込んで、そして面接を受けたんです。そのときはね、なかなか厳しくて……。やっぱり、わたしの論文は、關先生がやられている開拓社会研究とか、都市人口学などの社会学的手法とはちがう、文化人類学的研究をめざしているのですから、気に入らなかったのでしょう。これもしかたありません。井上修次先生は、「いろいろ欠点はあるけれど、視点はおもしろい」といつてくれました。

でも、わたしの思い上がりかもしれませんが、關先生はわたしがいないと困るわけです。というのは、開発局をはじめとするいろいろな委託調査をするのに、わたしがいると絶対役に立つわけです。そんなことで、じっと我慢をして入れてくれたのだらうと思います。結局、合格しました。

パイロットファーム調査

それで、まあ、ドクターにはいれたわけですね。それで（1960年）3月、梅棹先生が帰ったあと、気候がもう少しよくなってきた3月の末になって、初めて「お前、パイロットファームにいったかい」ということになりました。それで、その他の人たちはパイロットファームにテントで泊り込んでやってたわけですが、わたしのあたりからは、開発局の寮に泊まって調査にいくということになってきたんですよ。それは、富川さんが中心の北大・京大の調査隊のあとに、關先生がパイロットファームの調査を引き受けましたんで、そのお手伝いをするということで。

パイロットファーム調査については、1960年、熊本大学で開かれた日本民族学会・日本人類学会の連合大会で、富川さん、わたし、富田浩造、和田正平たちの共同で、初めて中央の学会での学会報告をしました。いまなら、札幌と熊本は飛行機で2時間ですが、そのころは、札幌を出て、東京で1泊、京都で1泊、そして夜行列車で熊本と大旅行でした。東京で図表のスライド撮影、京都でレジメの作成と、たいへんな旅でした。夜汽車のなかでも原稿を練るなど、ほとんど不眠不休で熊

本へいき、朝一番9時からの口演でした。16ミリの記録映画ももって行って、10分ほど上映しました。

そのとき、会場のいちばん前に岡正雄先生がすわってらして、質問もしていただきました。岡先生は、学会では、いつもいちばん前に陣取っておられて、若い研究者の報告にいろいろ質問をしてくださいました。いま考えると、岡先生は、そうやって、若い研究者の新しい研究をインスパイヤすると同時に、新しい研究動向にアンテナを張られていたのかなと思います。学会口演は、もっともフレッシュな、まだ論文にまとまる前の報告をするわけですから、それを耳学聞することは、もっとも能率的な、学会の研究動向の先端が知られるのでしょう。じつは、わたしは、のちにこの手法をお手本にしています。学会では、いちばん前に座って、聞くことにしていました。なかなかよい学習機会だと思っています。

でも、この学会の時には、原忠彦さんや原ひろ子さんなど、東大の大学院の研究者の、ポツと出のわたしが聞いたこともない外国の研究者の名前や、フィールドの地名がとびかう会話をかきま聞いて、ひそかにコンプレックスを味わったりもしました。

そうして、学会のあと、富川さん以下みんなで連れだって、天草へエクスカーションにいきました。ほとんどはじめての、本州旅行です。バスのなかのおばちゃんのおしゃべりが全然聞きとれなかったのを覚えています。また、荷物を全部持たされたうえ、赤ちゃんを背中に背負った奥さんが、何も持たないでゆうゆう歩くご主人の数メートル後をとぼとぼついて行く姿も、北海道出身で、男女平等になれたわたしにとってはショックでした。

そして、わたしは、長崎で一行と別れて、山陰の松江、横溝正史ゆかりの中国地方の中央部を旅して帰りました。新幹線などないし、宿泊代もかけられないので、中国縦断をのぞいて、ぜんぶ夜行列車です。いまは、学会に行くのも気軽ですが、そのときは、アルバイトでためたお金を使っただけの大旅行でした。この旅行の時も1泊させてもらったのですが、別の機会にも、富川さんの北区小山

下総町のご実家に滞在させていただいて、わたしは、初めて京都というまちにすむ京都のご家族と接することになります。修学旅行をのぞく、初めての京都経験でした。

学会口演のほかに、わたしには、パイロットファームについての論文があります⁵⁰⁾。また、關先生のパイロットファーム調査の報告書の中の何章かを執筆しています⁵¹⁾。

それから、1964年に、「パイロットファーム社会における人間関係と脱落離農者」というタイトルで、北海道社会学会でしゃべっています⁵²⁾。その調査はね、關先生のほうの仕事としては、営農成績がどうだとかそんなところまで調べましたけれども、わたし自身は、ある地区にはいりまして、ロールシャッハテストをやったんです。パイロットファームは官製の計画に従って入植するわけですが、同じ組の人々は、ここで会うのが初めての出会いで、だれと一緒にになりたいかということは選べないわけです。初対面で気心も知れない人びとと共同で営農をはじめるといことになります。とうぜん、あの人とは気が合うが、あの人とは合わないということがでできます。そこで、ある実行組合の人々のパーソナリティをロールシャッハテストで調べ、そこで調べたソシオグラムとつき合わせていったわけです。

実はこの研究は、まだ論文にはなっていません。わたしとしてはおもしろい研究ができたと思っていますが、これは、予報を北海道社会学会で口頭発表しただけで、そうこうしているうちにアフリカ行きの話になって、中断してしまいました。

第2回目の映画調査

そのあとやったのが、「都市人の映画行動とテレビ行動」という調査です⁵³⁾。これは、やはり富川さんを中心にして、1960年に、もう一度、札幌映画協会の委嘱でやることになりました。第1回目の調査後、テレビの普及率がぐんと高まって、映画は斜陽化といわれ、いよいよ危機感が現実になってきたわけです。そこで、「もう一度調査してくれ」ということになりました。

そこで、われわれはどういうことを結論したかというと、結局は映画をみる人は減りますよと。

これはもうどうしようもない。前の調査で予測されたことが、よりいっそうはっきりと結論づけられました。とくに、映画行動が、ほぼ完全に家庭や家族の場面からはなれてしまって、個人や社縁の関係にうつってしまったということです。このあたりの時代の変化についての考察は、わたしが京都文教大学紀要の『人間・文化・心』に書いた論文「戦後の都市文化の変化と流行：戦後社会史のなかで」で触れています⁵⁴⁾。街頭の時代からホームの時代にうつったということです。

そうして、いちおうわたしはドクター3年間、關先生ともつかず離れず、富川さんにむしろくっついていました。わたしは、まあ、よかったんだけれども、わたしのあとにはいった富田浩造と和田正平は、關先生にいじめられました。ついに和田正平はドクターを落とされちゃったんです。かれのマスター論文はね、パイロットファームにあとになってはいった山岸会の入植者の調査。かれは、關先生に、わたしを取るか富川さんを取るか、みたいなことをいわれたらしいです。で、もちろん「富川先生取ります」っていつちゃったかどうかは知らないけれども、とにかく落とされました。

北海道大学文化人類学科構想

われわれはそのころ、どういう夢をみていたかという、富川さんを中心に、北海道大学の文学部に文化人類学科、あるいは文化人類学コースを作ろうっていうことを考えていました。だから富川さんもけっこう政治的に動いたんです。富川さんがつくった計画書があったはずなのですが⁵⁵⁾、全体的には、北海道大学に作るのですから、やはり、北方のアイヌやエスキモー研究を意識したものでした。北海道大学には、学部を超えた北方文化研究所という組織があったのですが、それを文化人類学科へ収斂させようという計画でした。

どういうところで動いたかといいますと、調査の報告書をみてください、「北海道大学文化人類学協会」と書いてあるでしょう。「北海道大学文化人類学協会」の「社会人類学調査報告シリーズ」とか、「都市文化研究資料シリーズ」とかというふうに。

こういうのをどうしたかっていうと、そのこ

ろ、札幌に弘報社っていう広告代理店があって、そこが『マーケット北海道』っていう雑誌を出していたんですね。その一部を抜き刷りにして、シリーズにして出すということをやったわけです。だから『マーケット北海道』に載っていた広告も、そのまま残っているわけです⁵⁶⁾。

これがずうっと続いてまして、あとで、わたしもここで「北海道都市文化研究」などというものを何人かで立ち上げようと計画していました。これは、北海道の各都市で共通の質問票でおこなった都市文化調査のデータと、統計的特性、たとえば日照時間、降雨量といった自然的データや人口増加率、産業構成、小売業総売り上げといった社会経済的指数、それに農業者人口、漁業者人口、映画館数、大学数などの文化的指数を組み合わせ、その相関関係で因子分析とからめてみようなどという計画で、いまならコンピューターであつという間ですが、そのころは、それを手動の計算機でやろうなんて大それたことを考えていました。これは、アフリカにいくことになったので中断しましたけどね。その成果は、わたしが書いた序論⁵⁷⁾と、いくつかの都市の予備調査の担当者の論文になっています⁵⁸⁾。

そのころの北大の学長は杉野目晴貞⁵⁹⁾先生。この先生も、富川さんに非常に肩入れしてくれたんですが、あとで叱られました。ちょっと恨まれたんです。なぜかっていうと、その後われわれが一気にみんなでアフリカにいったから。だから北大には文化人類学専攻コースはかなりあとにならないとできなかったんです。けっきょく、あとで北方文化研究センターに発展して、それを母体にした文化人類学専攻コースができ、そこにアイヌやエスキモー研究者が集まったのですが、富川さんがおられたら、それがもっと早くにできたかもしれないです。けれど、富川さん自身が、アイヌではなくてアフリカにいったから……。

それで、まあ、富川さんを中心にわれわれがいろいろ動いて、毎月1回研究会を開いて、公開講演会みたいなのを開いて、そしてかなりえらい学者を呼んで、いろいろおしゃべりをしてもらって。そういうようなこともずいぶんやってまし

た。そのころの記録も探せばどこかにあるんでしょうけど……。

京大のサル研究

そうやってるうちに、1960年になって、今西錦司先生を中心にした京都大学のアフリカ類人猿調査隊がそのころにスタートするわけです。

今西先生はもともと動物生態学者で、最初はカゲロウの研究ですよね。カゲロウが、川の岸辺と真ん中で、ちがう種が棲み分けているという、棲み分け理論からはじまりました。つづいて、今西先生と、伊谷純一郎⁶⁰⁾先生や河合雅雄⁶¹⁾先生たちは、動物生態学、動物社会学といった分野で、最初は九州の都井岬で野生馬のフィールドワークをやったわけです。その野生馬を研究しているときに、その都井岬の先に幸島っていう島があって、そこにニホンザルが一杯いるという話になって、ウマもおもしろいけれどおサルはもっとおもしろいということで、サルの研究が始まったわけです。

ウマの研究もそうなんだけれども、今西先生以下の日本のおサルの研究は、その研究方法が画期的だったのです。何が画期的なのかっていうと、それまで生物学者は、サルとかウマを種としてしかみてなかったんですね。ところが、都井岬のウマもそうだし、それから幸島のサルもそうなんだけれども、こちらは、全部を個体識別して、顔を覚えて、名前をつけて。つまり種から個へと。つまり、そのサルたちが、毎日やってることを、一匹一匹顔覚えて、あれとあれが今日仲よくしたとか、あれとあれが今日喧嘩したとか、そういう形で調べ始めたら、群れの社会行動が出てくるわけです。人間なら、顔で笑って心で恨んだりしてるかもしれないけど、もっとも、おサルでもそういうことはあるかもしれないけれど、とにかく、個々の個体、集団のメンバーの行動をじっと観察していけば、サルの社会の仕組みがみえてくるわけです。

そして、ニホンザルの研究で、幸島、それから、大分の高崎山、そして京都の比叡山と、いろんなところに手を伸ばして、それから、東北の金華山のサル、それから下北半島のサルと、ずうっと伸ばしていって、世界的にそれで有名になったわけ

ね。つまり、個という、サルに一匹ずつ名前をつけるなどというのは、ヨーロッパの学者は、サルにまで適用できるとは考えてもいなかった。サルなんてみんな同じ顔していると思っていただけですよね。ところが、ちゃんと個性があるわけ、一匹一匹。

最初の海外科研

それから、1960年代になって、日本がようやく経済的にかなり発展して強くなってきた。そのところで、文部省が海外の調査を認めようということで、現在でもある、科学研究費補助金、いわゆる科研費に、「海外学術調査」という項目をつけたわけです。それに最初に認められたのが三つ。ひとつが京都大学の今西先生を中心にしたアフリカ調査。もうひとつが東京大学の泉靖一先生を中心にした南米アンデス調査。そしてもうひとつが、やはり東京大学中心のイランの考古学的発掘調査だったと思います。たしかその三つに科研費がついたんです。

文部省にしたらまだおっかなびっくりの時代で、とにかく科研費だけじゃお金が足りませんので、今西先生以下みんなで寄付集め。托鉢です。やっぱりそのころは珍しかったから、トヨタ自動車にいったら、「ああそうか、それはおもしろい、じゃ」。そのころはランドクルーザーじゃなくて、大きなトラックだったけれど、それを「2台あげよう」とか。鉄の会社は景気よかったから、「そうですか、それじゃ50万くらい」とかね。

わたしたちも北海道を中心に、その募金をずいぶん手伝いました。パイロット万年筆にいて、万年筆を30本いただいてこようとか、いろいろと考えて。そうだ、そのころはまだボールペンが普及してなかったんだ。いちばんおもしろかったのは、アフリカにいったらライオンがいるだろう、ライオンを来ないようにするには何かないかっていうことで、富田浩造と考えてね。北海道に電気牧柵というのがあります。牛が逃げないように、電線を張って、電気を通す。それに牛が触ると、高圧だけれどアンペアが低いので、ショックは受けるけど害がないというものです。それをもらおうじゃないかっていうことで、北海道農業連合会、

「ホクレン」へいって、「電気牧柵をくれ」っていったら、「それはおもしろい」っていうわけです。で、もらって、持っていったんだけど、アフリカには電気がないわけです。発電機つけないと電気がない。

富川さん、アフリカへ

今西先生はサルの研究を何のためにやってたかという、最後には人間と結びつかないやないかと考えていた。あの人はダーウィンの進化論の批判もしたんだけど、サルの研究は最終的には人間と結びつかないやない、というわけ。その中でどういうことを考えたのかという、まずひとつはニホンザルより人間に近いチンパンジーやゴリラをやるやないかということで、アフリカにいくんだと。そして、もうひとつ、今西先生のえらかったのは、サルをやるんなら人間をやってもいいやないかっていうことで、人間、いわゆる生産様式の発達の段階で、狩猟採集民、牧畜民、それから農耕民というところをやるやないかということです。そうすると、おサルの今西先生とか河合先生とか伊谷先生とかではやれない、ということで、梅棹先生とか、富川さんとか、そのへんに声がかかったわけです。

そして、1961年に富川さんが、富川グループの中からいちばん屈強な富田浩造を連れて、2人でアフリカにいったわけですね（1961年11月～1964年4月）。アフリカでは、タンザニア中北部にある、エヤシ湖という湖の東方にひろがるマンゴラという格好のフィールドが選ばれました。ここは、非常におもしろいところで、ひとつの地域社会のなかに、ハツツアという狩猟採集民、グトーガという牧畜民、イラクという半農半牧民、そしてスワヒリという多くの部族社会出身者で構成される農耕開拓民が共生している場所です。そこで、富川さん、梅棹先生、和崎洋一⁶²⁾さん、石毛直道⁶³⁾さん、のちには米山俊直⁶⁴⁾さん、藤岡喜愛さんなども加わり、10年以上の継続調査がおこなわれたのです。

市場調査請負

で、わたしと和田正平が、孤立無縁、北大に残っ

ちゃったわけです。富川研究室というのがありましたから、毎日そこに顔出してたわけなんだけれど、もう、和田正平はドクターを落とされるし、2人で孤立無縁にいたわけです。

そのころにわたしたちはやっぱり生きていかなきゃならないし、それから、まあ、富川先生という重しがなくなった気楽さもあって、ずいぶん怠け、遊びました。そのころ何をやったかという、市場調査請負です。いろんな会社に「こういう調査をやらないか」って声をかけたり、あるいは向こうから頼まれることもありました。たとえば、ある食品会社がパン粉を作って売り出したいという。じゃ「パン粉についての調査をしてくれませんか」というようなことになると、わたしと和田正平とで、クエッションネアを作るわけです。そして、こういうことを知るために、こうやって調べて、といって企画を売り込むわけです。で、「よからう」となると、そこで契約する。そして、北大の学生をアルバイトに使って市場調査をやるわけです。そして、そのデータを集計して、報告書を書く。ここまでやると、大規模な調査だったら100万円くらいになるわけですね。そういう調査を引き受けるようになって、かなり稼ぎましたね、そのときは。だけど稼ぐと同時に、これはやっぱり社会学の調査ですから、わたし自身にとってもひとつひとつ身につくことをやってたわけです、いま、正当化すればね。

そのときに調査したことのひとつ、おもしろいのはね、日本酒の会社から頼まれて、酒類の調査をしたら、どうやっても何年か後にビールの消費量が日本酒の消費量を越すということがデータで出てきちゃったわけ。で、そのとおり、報告書に書いたら怒られましたね。「そんなことがあり得るわけない」っていうわけ。「いやしくもこの日本で、日本酒がビールに追い越される、そんなこと考えてもみない」っていうわけね。だけど実際追い越されちゃった。そんなような、けっこう、恐ろしい、おもしろいこともやったものです。

また、そのころ放送開始10年を迎えた民間放送である北海道放送の社史に、「民間放送の10年史」なんていう項を執筆したり、いまは消滅した北海道拓殖銀行の社内報に原稿を書いたり、『北海道

新聞』の「北海道を考える」シリーズに北海道のマスコミについて書いたり、いろいろ、八面六臂、富川さんがおられないのいいことに、富川さんのいいまちがえにしたがえば、「稼ぐに追いつく貧乏暇なし」といった状況でした。毎日遅くまで飲んで、終列車にとび乗ったり、白タクで江別まで20キロ走らせたりの生活でした。外からみれば、かなり、荒れた生活にみえたかもしれません。自分としては、そう放埒な暮らしをしていたとは思ってはいないのですが……。放埒といえ、よく想像される、男女の何とかといった話についていえば、全く縁のない暮らしでした。

そして、わたしもアフリカへ

そうやってるうちに、富川さんらはアフリカで3年間フィールドワークをやって帰ってこられたんです（1964年4月）。富川さんには、3年間おまえたちは、勉強もせんと、何をやってたんだと、だいぶしかられました。3年のアフリカ滞在で富川さんは、見る影もなくやせて、真っ黒に日焼けされ、目玉ばかりがぎょろぎょろと、とても精悍に見えました。でも、のちのご病気のかかなりの部分は、このアフリカで背負ってこられたのだろうと思っています。

だいたいそのころから話は決まっていたみたいなのですが、第5次隊か6次隊くらいに、タンガニイカ湖畔のウジジという都市でわたし、マンガラに近いハナンというところのイラク族の社会に和田正平と京都大学の福井勝義⁶⁵⁾がはいるというようなわけで、われわれ2人がアフリカに行くことになったんです。

今西先生のえらかったのは、農耕民までやるんだったら、いっそのこと人類文明の、いちばん進んでいる、都市をやる人がいてもいいんじゃないかということになったわけ。それと、もうひとつは、京大のチンパンジーの研究者たちはみんな山の中にはいっちゃうわけでしょう？ 山の中にはいっちゃうと、日本との連絡がうまくとれないわけです。そこで、チンパンジーを研究している人たちがときどき出て来るまちに1人置いておいてもいいんじゃないかっていうことになる。それがウジジっていうまちだったわけです。タンガニイ

カ湖畔のトンゲ族の地域がおサルの人たちの研究していた地域で、わたしがその近くのまち、ウジジにいれば、連絡にも便利だし、また、類人猿班の人びとがまちに出てきたときの基地にもなるというわけです。富川さん自身も、わたしを入れようという魂胆があって、「あいつを入れるのはどこがいいのか」っていうことでずいぶん調べてもくれたみたいです。マンガーラの近くのドンゴベシという小さなまちへわたしを住ませようという計画もあったようです。いずれにしても、結局、わたしはウジジで住み込み調査をやることになりました。

7月に、京都へ呼ばれ、梅棹先生の北白川のご自宅に居候させていただいたり、そのころ日本でいちばんアフリカ関連の資料がそろっていた、天理大学の図書館に通うため、天理教本部の宿泊所に何日も泊めていただいたり、アフリカから帰ったばかりの端信行さんや谷口穰さん、あるいは類人猿班の東滋さんにフレッシュな話を聞いたり、暑い毎日でしたが、充実した日々を過ごしました。ほんとうに、初めての京都の夏は暑かった。

そして、準備のために、いったん故郷の江別に帰ると、親友の赤石義博くんたちの肝いりで、江別いちばんの料亭で、市長さん以下たくさんの方々が出席する送別会が開かれました。どの方々からも、アフリカに行ってライオンに食われないようにとか、人食い人種に気をつけてとかいうご挨拶つづきで、わたしの母親は、ずいぶん心配したようです。また、アフリカに都市なんかあるのという当然の疑問もだされました。ありがたいことに、身に余るけっこうな額のお餞別をいただきました。これは、貧乏学生にとってとてもありがたかったです。

和田正平とわたしが出発したのが、1964年の9月ですね。あと2週間かそのぐらいで、東京オリンピックが開かれる、それから新幹線が通るっていうときです。福井くんは1ヵ月後の出発でした。われわれは、今西先生のお供をして出発したのです。今西先生の最後のアフリカへの旅でした。

われわれは今西先生について京都大学の一員としていったのですから、京都から一度東京へ出

て、羽田から旅立つということになります。もちろんそのころは、成田も関空もなく、新幹線はありません。東京までは飛行機でした。そして、東京で1泊して、翌日羽田へということでした。アフリカまでも、いまのように、何十時間というのではなく、香港で1泊、ボンベイで1泊という旅でした。でも、こうしてわたしは、アフリカへいったのです。そして、ウジジにはいったわけですね。

注

- 1) 嶋禎男(藤倉徹夫編)『わたしの江別 しまやん炉辺談話』(出版社不明、1986)に、「金はいらない・名医日野本男」として、日野さんの父・日野本男氏のことが書かれている(120-124頁)。
- 2) 本庄陸男(1905～1939)。北海道生まれ。プロレタリア作家。代表作に『石狩川』(1939)など。
- 3) ジョン・ヒューストン(1906～1987)。アメリカの映画監督。1941年に『マルタの鷹』でデビュー。『黄金』(1948)で、アカデミー監督賞、脚本賞を受賞。ほかに、『キー・ラーゴ』(1948)、『白鯨』(1956)、『アニー』(1982)など。なお、日野さんのジョン・ヒューストン論は、北海道大学映画研究会の機関紙『しねあすと2号』に掲載されている。
- 4) 鈴木榮太郎(1894～1966)。社会学者。岐阜高等農林学校、京城帝国大学をへて、1947年より北海道大学教授。著書に『日本農村社会学原理』(1940)、『都市社会学原理』(1957、増補版1965)など。
- 5) 鈴木榮太郎『都市社会学原理』の「小序」には、次のような記述がある。
「昭和二十二年、北大にきて以来、私の研究はずっと都市社会学に集中している。私の社会学特殊講義は、毎年、都市社会学という同一の題の下に次々に新しい問題を取扱ってきたが、ついに昭和三十一年度の講義で私の都市社会学の体系をなす全十章を一応終える事ができた。ここに公にする本書は、右の講義案に少しばかり推敲を加えたものである」

- (鈴木榮太郎『鈴木榮太郎著作集Ⅵ 都市社会学原理』未来社、1頁)。
- 昭和31(1956)年は、ちょうど日野さんが社会学の学部生として在学していた時期でもある。
- 6)『日本農村社会学原理』は、実証的なデータにもとづき、日本農村に関する社会学的研究の基礎をきずき、日本農村社会学を樹立した社会学の古典。「自然村」概念で有名。
- 7)有賀喜左衛門(1897～1979)。社会学者。東京教育大学教授、慶応大学教授をへて、日本女子大学学長。日本の家・同族・村落社会などに関する実証的研究により、社会学のみならず、人類学、社会史などにも大きな影響を与えた。著書に『日本家族制度と小作制度』(1943)など。
- 8)竹内利美(1909～)。社会学者。東北大学名誉教授。長野・東北地方の農村における郷土誌・家制度・村落社会構造の歴史研究などを行う。
- 9)岡正雄(1898～1982)。民族学者。東京都立大学、明治大学教授を歴任ののち、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所長。エスキモーやオーストリアの農村調査などを行うとともに、日本民族文化の形成についても研究のテーマとした。また、民族学のオルガナイザーとして、若い研究者の育成にもつとめた。
- 10)馬淵東一(1909～1988)。社会人類学者。東京都立大学名誉教授。台湾、インドネシア、沖縄における調査から、親族組織、儀礼、信仰について研究。
- 11)富川盛道(1923～1997)。社会人類学者。東京外国語大学名誉教授。日本におけるアフリカ調査研究の発展に尽力し、アフリカ学術調査研究の組織化推進にも多大な貢献を果たした。
- 12)今西錦司(1902～1992)。生物学者・探検家。京都大学名誉教授。いわゆる京都学派を代表する研究者のひとりで、野生動物の観察に個体識別法を導入し、日本における霊長類学を創始しただけでなく、生態学・人類学・進化理論などの領域においても優れた業績をあげ、多くの後進を育てた。著書に『生物社会の論理』(1949)、『私の進化論』(1970)など。
- 13)梅棹忠夫(1920～)。文化人類学者・比較文明学者。京都大学教授をへて、国立民族学博物館初代館長。西欧をモデルとした単系発展段階論に挑戦した「文明の生態史観序説」(1957)は、学界・論壇に大きな波紋をまきおこした。著書に『文明の生態史観』(1967)、『知的生産の技術』(1967)など。
- 14)川喜田二郎(1920～)。文化人類学者。南洋諸島、ネパール、東アジアなどの民族調査に従事。大阪市立大学、東京工業大学、筑波大学教授を歴任。野外科学の方法の確立を目指し、KJ法を提唱。著書に『鳥葬の国』(1960)、『発想法』(1967)など。
- 15)1942年5～7月、今西錦司を隊長としておこなわれた、北部大興安嶺探検隊のことで、隊員には、梅棹忠夫、川喜田二郎のほか、吉良竜夫(のち大阪市大教授、生態学)、藤田和夫(のち大阪市大教授、地質学)らがいた。ただし、今西錦司『大興安嶺探検』などの著作に、富川盛道・市原実両氏の名前は出てこない。当時の年齢から考えて、非公式の参加だったのではないかと推測される。
- 16)市原実(1925～)。地質学者。大阪市立大学名誉教授。主に大阪の地層群に関する研究で知られる。
- 17)泉靖一(1915～1970)。文化人類学者。済州島、中国東北のゴルディ族、ブラジル日系人、古代アンデス文明などを調査。東京大学教授として、石田英一郎とともに文化人類学研究室の創設に尽力した。東京大学東洋文化研究所長在職中に病死。『インカ帝国』(1959)など。
- 18)蒙古研究所、回教圏攷究所などとともに、内モンゴル、張家口の対モンゴル友好工作機関であった蒙古善隣協会に設けられた研究所。所長には今西錦司、次長に石田英一郎、所員には梅棹忠夫など、戦後、日本の人類学を背負うことになる人材がそろっていた。
- 19)マリノフスキー(1884～1942)。ポーランド

- 生まれの人類学者。トロブリアンド諸島の調査などをもとに、機能主義を提唱した。それまでの思弁の人類学と決別し、原住民と生活をともにして調査する参与観察法は、今日に至るまで、文化人類学のフィールドワークの範型となっている。
- 20) ラドクリフ＝ブラウン (1881～1955)。イギリスの社会人類学者。インド洋のアンダマン諸島民を調査し、社会構造は機能の継続によって維持されると主張。マリノフスキーとともに、近代人類学、機能主義的人類学の創始者とされる。
- 21) レイモンド・ファース (1901～2002)。ニュージーランド生まれの社会人類学者。ソロモン諸島のティコピア島を主なフィールドとし、経済人類学の確立に貢献した。
- 22) エヴァンズ＝プリチャード (1902～1973)。イギリスの社会人類学者。1920～40年代、スーダン、ケニア、エチオピア、リビアなどの調査に従事。
- 23) 結城錦一 (1901～1997)。実験心理学者。北海道大学教授をへて、中京大学教授。
- 24) 梅岡義貴 (1920～)。学習心理学者。北海道大学教授をへて、東京大学教授。
- 25) 知里真志保 (1909～1961)。言語学者・アイヌ出身のアイヌ文化研究者。1947年北海道大学講師を経て、58年より教授。アイヌ語学の研究を中心に、説話・宗教・風俗などをふくむ、総合的なアイヌ学をめざした。『アイヌ語法研究』(1942)、『分類アイヌ語辞典—植物篇』(1953)、『分類アイヌ語辞典—人間篇』(1954)、『分類アイヌ語辞典—動物篇』(1963) など。
- 26) 関根康正編『〈都市的なもの〉の現在』東京大学出版会、2004、77頁。なお、引用文中の「助教授」は「教授」が、『都市社会学原理』は『都市社会学原理』が正しい。
- 27) フュステル＝ド＝クーランジュ (1830～1889)。フランスの歴史家。
- 28) 田辺貞之助訳『古代都市 —ギリシャ・ローマに於ける法律・制度の研究』(白水社、1944)
- 29) 北海道沙流郡平取町。古くから沙流アイヌの居住地として知られ、町内の二風谷地区には、アイヌコタンと二風谷アイヌ文化博物館、マンロー博士記念館(北海道大学北方文化研究施設) などがある。
- 30) たとえば、鈴木榮太郎『都市社会学原理』に次のような記述がある。
- 「(c) 映画館の利用者圏に関する調査
(1) 調査対象 この調査においては、二種の映画館が選定された。一つは都心から遥かに離れた場所にある所謂場末の映画館(札幌市北八条東五丁目のH劇場)、今一つはと新築にある映画館(札幌市南一条西二丁目のN劇場)である。都心の映画館と場末の映画館ではその利用者の地域圏に著しく異なるものがあるであろうとの予測からである。調査期日は、H劇場の場合は昭和三十一年七月十六日の午前十時から午後八時までの十時間、N劇場の場合は、翌十七日の同時間である。北海道大学社会学教室の二人の助手と約二十人の学生が、この調査の労をとった」(鈴木榮太郎『鈴木榮太郎著作集 都市社会学原理』未来社、370頁)
- この「約二十人の学生」のなかのひとりが、日野さんだったわけである。
- 31) 札幌映画協会『都市人と映画—札幌市における映画観覧の実態調査』(1957)の「はしがき」に、「この調査は、北海道大学文学部社会学研究室内社会心理研究会、富川盛道、布施鉄治、日野舜也、佐藤明、小坂順一、赤石義博、荒田悦郎、菊池武光の八名を中心として行われた」(2頁)とある。
- 32) 報告書では、「映画をみること」にかんする、「一定のしきみをもったいくつかの行動のひとつは、あるいは、ひとつづきのぜんたいをさして、とりあえず、『映画行動』とよんでおこう」とあり、この「映画行動」の品目として、「映画館へいって映画をたのしむ」「観覧行動」、「キップを買」い「映画館へはいる」「準備行動」、「どの映画をみるという」「撰択行動」、「どこでどの映画をやっているかという情報のキャッチ」である「コミュニケー

- ション行動」があげられている(12-13頁)。
1960年の調査報告書、北海道大学社会心理学研究会『都市人の映画行動とテレビ行動』では、「コミュニケーション行動(情報行動)」となっている(3頁)。
- 33) マーガレット・ミード(1901～1978)。アメリカの女性文化人類学者。主として南太平洋の各地を調査し、文化とパーソナリティの理論形成に大きな役割を果たす。『サモアの思春期』(1928)など。
- 34) ルース・ベネディクト(1887～1948)。アメリカの女性文化人類学者。戦時下に、間接的資料によっておこなわれた日本研究である『菊と刀—日本文化の型』(1946。のち、社会思想社より邦訳)は、西洋の罪の文化に対して恥の文化の存在を主張し、日本の諸学界に大きな反響を呼んだ。
- 35) クラックホーン夫妻。アメリカの文化人類学者。夫クライド(1905～1960)と妻フロレンス(1905～)。クライドは、20年にわたってニューメキシコ州のナヴァホ・インディアンの調査に従事、人格形成過程と思考様式、価値観の分析、妖術の研究などをおこなった。
- 36) 祖父江孝男(1926～)。文化人類学者。国民性の比較研究など。『県民性』(1971)、『文化とパーソナリティ』(1976)など。
- 37) 原ひろ子(1934～)。文化人類学者。お茶の水女子大学名誉教授。女性学、ジェンダー研究。『ヘヤー・インディアンとその世界』(1989)など。
- 38) 藤岡喜愛(1924～1991)。文化人類学者。「精神人類学」の確立に貢献。『イメージと人間』(1974)など。
- 39) 片口安史(1927～1995)。国立精神衛生研究所をへて、中京大学教授。1957年、東京ロールシャッハ研究会を創設し、『ロールシャッハ研究』を発刊。
- 40) 和田正平(1937～)。文化人類学者。国立民族学博物館名誉教授。『性と結婚の民族学』(1988)など。
- 41) 富田浩造(1931～)元国際開発事業団タンザニア所長。
- 42) 關清秀(1917～)。社会学者。北海道大学名誉教授。『都市の家族』(1966)など。
- 43) 井上修次(1909～)。人文地理学者。北海道大学名誉教授。「地割」の研究で有名。
- 44) P.M.KABERRY ed. "The Dynamics of Culture Change, An Inquiry into Race Relations in Africa" Yale University Press, 1945。のち、藤井正雄訳『文化変化の動態』(理想社、1963)として邦訳。
- 45) MINER, H. "The Primitive City of Timbuctoo" Princeton University Press, 1953。のち、赤阪賢訳『未開都市トンプクツ』(弘文堂、1979)として邦訳。
- 46) 笹森秀雄(1925～)。社会学者。旭川医科大学名誉教授。
- 47) 布施鉄治(1930～1995)。社会学者。北海道大学名誉教授。地域社会における家族生活を生産、労働、生活過程総体の分析を通して解明。『行為と社会変革の理論』(1972)など。
- 48) ロバート・フラハティ(1884～1951)。アメリカの記録映画監督、探検家。『アラン』は1936年に発表された。『アラン』以外の作品として、イヌイット一家の生活記録『極北のナヌーク』や、ポリネシアの人びとの記録『モアナ』など。「ドキュメンタリーの父」と呼ばれ、映像人類学の先駆者として位置づけられる。
- 49) 北大・京大・合同雪上車踏査隊「根釧開発地域踏査計画書—雪上車隊による積雪期北海道の総合調査—」1959.12
- 50) 日野舜也・和田正平「パイロット・ファームの農民—機械化と農民意識—」1961。北海道大学文化人類学協会 社会人類学調査報告シリーズ 1。『マーケット北海道』の抜刷だと思われる。注56) 参照。
- 51) たとえば、日野さんの蔵書に「開発事業効果の測定に関する研究—パイロット・ファームの建設と地域社会の変動—」という報告書がある。奥付がないので発行元、発行年月日が確定できないが、北海道開発局農業水産部長が「昭和33年6月15日」の日付で「序」

- を寄せており、はしがきには「昭和34年5月31日 北海道大学社会学研究室にて 関清秀」とある。調査期間は昭和34年1月21日より1月31日まで、調査参加者は「北海道大学助教授 関清秀 講師 笹森秀雄 助手 富川盛道 助手 布施鉄治」となっている。
- 52) 1964年2月17日、北海道大学クラーク会館で開催された第11回北海道社会学会大会での報告で、「第11回北海道社会学会大会報告要旨」にその要旨が掲載されている。
- 53) 調査は1960年4月に実施され、報告書は北海道大学社会心理学研究会『都市人の映画行動とテレビ行動 札幌市における大衆文化に関する実態調査』として、1960年12月に刊行された。なお、この報告書の表紙には、「北海道大学社会心理学研究会調査報告 No.2」と書かれている。
- 54) 日野舜也「戦後(1945年以後)の都市文化の変化と流行 ―戦後社会史のなかで―」『京都文教大学人間学部研究報告第四集』2001
- 55) 日野さんが預かっている富川盛道氏の遺品のなかに、「人類学部設置案」という青焼きコピー冊子がある。年月・場所などが明記されていないが、おそらく北海道大学時代のものであろう。これによると、「社会人類学科」「文化人類学科」「人類生態学科」「人類個体学科」「人類精神学科」「人類進化学科」「理論人類学科」「人類学特論研究部」の8研究部門と資料・図書室、資料センター、電子計算機室、測定・検査室、標本室の共通施設、事務部門からなる「人類学部」(教授19名、助教授38名、助手28名、研究補助員19名)の設立をめざす、壮大な計画だった。
- 56) 『マーケット北海道』からの抜刷と思われる研究シリーズとして、日野さんの手元に残されている資料を以下にあげておく。
「北海道大学文化人類学協会」の「都市文化研究資料シリーズ」
No. 1 富川盛道「都市のパスナリテイ―北海道文化と札幌人―」1960.7
No. 2 富川盛道「余暇文化論ノート(附座談会記録) ―余暇座談会の資料的とりあつかい―」1960.11
No. 4 日野舜也「テレビ時代における都市生活の変容 ―札幌市民のテレビ受容について―」1961.7
「北海道文化人類学協会」の「社会人類学調査報告シリーズ」
No. 1 日野舜也・和田正平「パイロットファームの農民 ―機械化と農民意識―」1961.10
No. 3 日野舜也・和田正平「北海道文化の形成 ―道民のファミリーヒストリイと道民性イメージを中心に―」1963.10
No. 4 和田正平「都市の文化・2 ―都市の文化論的考察 『室蘭市』」1964.9
「北海道大学文化人類学研究会」の「社会心理学研究資料シリーズ」
No. 1 タイトルなし。上記富川盛道「余暇文化論ノート」と同内容。1960.7か?
No. 2 富田浩造「都市の余暇調査 ―札幌市民の生活文化の研究―」1961.2 (これは、「北大文化人類学研究会」となっている)
- 57) 序論とは、日野舜也・和田正平「北海道文化の形成 ―道民のファミリーヒストリイと道民性イメージを中心に―」(北海道文化人類学協会 社会人類学調査報告シリーズ No. 3) 1963.10のことと思われる。
- 58) たとえば、和田正平「都市の文化・2 ―都市の文化論的考察 『室蘭市』」(北海道大学文化人類学協会 社会人類学調査報告シリーズ No. 4) 1964。
- 59) 杉野目晴貞(1892～1972)。化学者。北海道大学名誉教授。1954年から1966年まで、北海道大学学長。アルカロイドに関する研究で、日本化学会賞受賞。
- 60) 伊谷純一郎(1926～2001)。京都大学名誉教授。今西錦司とともに日本の霊長類学の発展に貢献。ニホンザルやアフリカでの類人猿調査などに従事。『高崎山のサル』(1954)など。
- 61) 河合雅雄(1924～)。自然人類学者。京都大学名誉教授。日本におけるサル学の第一人者。『森林がサルを生んだ』(1979)など。

- 62) 和崎洋一 (1920～1992)。文化人類学者。元富山大学教授。タンザニアのバンツー系諸族の調査に従事。1979年、『スワヒリ語辞典』を出版。
- 63) 石毛直道 (1937～)。文化人類学者。日本の食文化研究の第一人者。1997年から2002年まで、国立民族学博物館長。『食事の文明論』(1982) など。
- 64) 米山俊直 (1930～)。文化人類学者。京都大学名誉教授。アフリカの都市研究から日本の祭りまで幅広いフィールドを持つ。『祇園祭』(1974)、『アフリカ学への招待』(1986) など。
- 65) 福井勝義 (1943～)。文化人類学者。京都大学教授。『認識と文化』(1992) など。